

---

# それぞれの死

栗原峰幸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それぞれの死

### 【Nコード】

N7268K

### 【作者名】

栗原峰幸

### 【あらすじ】

税務課から生活福祉課に人事異動になった北島栄太郎は生活保護の業務を通じて、様々な死に直面する。「反骨のアパシー」「氷解」の前のストーリー。

## 人事異動く腐乱死体

「君には福祉事務所に行ってもらおうよ。生活福祉課、いわゆる生保だ」

内示を受けた北島栄太郎は正直、面食らっていた。今日は三月二十八日、公務員の内示の日だ。帰帆市役所の税務課に勤務していた栄太郎は、総務部長から内示を聞かされた。

「生保って、市役所でも生命保険を取り扱っているんですか？」

「馬鹿だな。市役所で生保と言ったら、生活保護のことなんだよ」  
総務部長は笑っていた。どこか厭味のある笑いだ。

「生活保護って、あの三大不人気職場の……」

栄太郎は知っていた。生活保護の業務は今勤務している税務課に並ぶ不人気職場なのだ。他に市民課の市営住宅班も不人気職場として名が知られている。

「不人気職場かどうかは知らん。まあ、宮仕えは我慢が肝心だな。はい、次の倉内さん呼んで……」

総務部長は一旦、書面に目を落とすと、プイと横を向いてしまった。栄太郎は目の前が真っ暗になる感覚に襲われた。

面接室を出た栄太郎は「はあ」と重いため息をついて、廊下の壁に寄りかかった。

(今の税務課もキツイけど、生活保護はもっとキツイだろうな……)  
栄太郎は壁に寄りかかりながら、そんなことを考えていた。引き返す廊下が異様に長く感じられた。

税務課に戻り、同僚の宮内から「どうだった？」と聞かれた栄太郎は、「最悪です。生活保護だそうです」と答えた。

「生保かあ。生保はここよりキツイぞ。苦情もよくあるらしいし、毎日残業だそうだ」

宮内は同情するように栄太郎の肩にポンと手を置いた。

「ここより大変なんですか？」

「噂じゃ、そうらしい。税務課から生保に行く人事は多いよ。何でも搾り取る方の苦労を経験させておいて、今度は出し惜しみをさせるのが狙いらしい。まあ、お前もツイてないねえ……」

宮内はそう言うと、給湯室の方へ歩いていった。

「はあ」

栄太郎から出るのは鉛のように重いため息ばかりであった。だがこの時、まだ栄太郎は生活保護の何たるかについて、まだ理解をしていなかった。

栄太郎はその足で市役所の三階にある生活福祉課を覗きにいった。すると、何やら窓口で騒いでいる男がいる。

「何で今月の保護費は少ねえんだよ！」

その男は大声を出し、窓口のカウンターを拳で叩いていた。

「だから、奥様が入院されたら入院患者日用品費に変更になるって言っただじゃないですか」

窓口対応した男性職員は涼しい顔をして、言った。その言葉は事務的だった。

「女房が入院して何かと入用なんだ。借金もある。何とかならんのか？」

男は職員に詰め寄る。

「なりませんね。国の基準で決まった金額ですから。それに生活保護は借金を返済する制度じゃありません」

職員は眉一つ動かさず、そう言って退けた。

「あんたは俺たちに死ねって言うのか！」

男は更に声を荒げ、ドンとカウンターを叩いた。男の背中が震えている。

「そうは言いませんが、法律で決まっています。今月はあの保護費でやってもらっしかありません」

男は逆上した。男は「この野郎！」と怒鳴りながら、デスクに置いてあったペン立てを職員に投げつけたのだ。

「何をするんですか！」

逆上した男はカウンターを乗り越えようと、身を乗り出した。すると、すかさず数人の職員が駆け寄ってきて、男を押し戻した。

「これ以上、騒ぎを起こすと警察を呼びますよ」

男は「畜生！」と喚いて、階段の方へ向かって走って行った。槍玉に挙げられた職員は、少しネクタイを直すと、何事もなかったかのように、自分のデスクへと戻っていった。

栄太郎はそのやり取りを見て、「果たして自分に勤まる仕事だろうか？」と疑問に思った。更にそれ以上に生活保護の業務に畏怖の念を覚えていた。

今年で二十六歳、この帰帆市に勤めて四年になる栄太郎であったが、こんな職場もあるものかと、正直なところ驚いたものである。税務課もそれなりに大変ではあったが、目の前で修羅場を見せられ、かなり不安になった栄太郎であった。

栄太郎の心に影を落としたのは、目の当たりにした光景だけではなかった。栄太郎の父、長太郎もまた湯鶴町という所で生活保護を受けていたのだった。栄太郎は今、母の昭子と暮らしている。それは度重なる長太郎の暴力から逃れるために、この帰帆市へ逃げてきたのだ。今は離婚が成立している長太郎と昭子だが、その道のりは長いものだった。その経過については後ほど詳しく述べよう。

四月一日、正式に辞令を貰った栄太郎は生活福祉課へと赴いた。

栄太郎には生活福祉課の空気が限りなく乾いて見えた。皆、デスクに向かい孤独と戦っているような印象を受けたのである。

係長の席に座っている男が栄太郎を手招きした。栄太郎は係長のデスクに向かった。

「私が係長で査察指導員の高橋良雄だ」

「査察……指導員ですか？」

査察指導員の何たるかもわからない栄太郎である。

「まあ、この万年係長だ。北島さんだったね。あんたは地区担当員、つまりは生活保護のケースワーカーだ」

「済みません。僕は生活保護の何たるかもよくわかっていないんです」

「それはこれから、みっちりと俺が教えてやるさ。はいこれ」

栄太郎の前に三冊の本が置かれた。

「何ですか、これ？」

「厚生労働省が出している『生活保護手帳』に『別冊問答集』、それに県がまとめた『生活保護の取り扱い実務集』だ。今時、どんな家電でも三冊くらいのマニュアルが付くだろう。実務上、これは必要だからデスクにいつも置いておきなさい」

栄太郎はその三冊を手に取った。ズシリと重かった。

（果たして、これを抱えきれののかな？）

そんな疑問が栄太郎の心の中に湧いた。だが、高橋係長は席を立つと、栄太郎の背中をポンと叩いた。

「皆、今日から新しくこの生活福祉課に配属された北島栄太郎さんだ」

高橋係長がフロアに響き渡るような、大きな声で課員に栄太郎を紹介した。栄太郎は「北島です。まだ何もわかりませんが、よろしくお願い致します」と出来るだけ大きな声で言い、頭を下げた。課員たちは立ち上がり、栄太郎に軽く頭を下げた。だが、すぐに自分のデスクへと向かうとパソコンや書類に目を落としていった。

「北島さんはまだ主事だから席は一番フロア側……と言いたいところだが、この仕事に初めて就く人は俺の前で決まっているんだ」

高橋係長は笑いながら、自分の前のデスクを指した。

「係長はこの仕事、長いんですか？」

「俺は生保一筋、三十五年だ。まあ、万年係長だし、今更出世はしたくないけどな。そんな俺だから『歩く生活保護手帳』なんて言われているよ。これから、みっちリシゴクから覚悟しておけよ」

「はあ……」

栄太郎はわけもわからず生返事を返すことしかできなかった。

「取り敢えずは、席に着いてケースファイルでも読んでおきたまえ。」

デスクの引き出しに入っているから……。あんたの担当地区は百日台周辺だ」

栄太郎はデスクの引き出しを開けた。そこにはぎっしりと水色のファイルが詰め込まれていた。栄太郎はそこから一冊のファイルを取り出すと、おもむろに眺めた。

すると、そこには住所や本籍はもちろんのこと、病歴や生育歴などが事細かに記されていたのである。そして、記録には難解な専門用語が羅列してある。

(すごい。すごい情報を取り扱っているんだ……)

栄太郎は心の中で唸った。思わずケースファイルを読み耽ってしまった。

「北島さんはこれから面接室に来てもらう。まず、生活保護の何たるかを理解してもらわなきゃな」

高橋係長は膨大な資料を抱え、立ち上がった。栄太郎はまだケースファイルを読んでいる最中だったが、メモを片手に高橋係長に続いた。

面接室は薄い衝立のような間仕切りで囲まれた部屋だった。そんな面接室がいくつも連なっている。二人はその一室に入った。

「まず、生活保護の何たるかを教えてやらなければな」

高橋係長が腕組みをした。

生活保護とは日本国憲法の第二十五条の生存権を具体的に保障する制度で、生活に困窮する人々に対し、無償で金銭等を給付する制度である。それは最低限度の生活が営めるレベルのものとなっている。生活保護はセーフティネットとして最後の網の目の役割を担っていることから他法他施策が優先される。そこで救えなかった場合はじめて生活保護が適用されるのだ。まずはそんな説明を栄太郎は高橋係長から受けた。

そして、生活保護の申請から決定までの、一通りの流れの説明を受けることになる。

だが正直なところ、栄太郎には話の半分も理解できなかった。そんな栄太郎を見透かしてか、高橋係長は「まずは習うより、慣れるだ」と言った。

午前中のレクチャーが終わると、栄太郎は自分のデスクに着いた。そして、「ふう」とため息をついた。頭の中はパンクしそうだった。

「田所、この通院移送費の決定は定例じゃなくて随時支給だろう」

「戸沢、日向のロクサン、どうなった？」

「楠木、弓田の80条免除の検討が甘いぞ」

高橋係長から発せられる言葉は、どれも栄太郎には理解不能で、宇宙人の会話を聞いているような錯覚を覚えたものである。

栄太郎が呆けたような顔をしていると、突然、目の前の内線が鳴った。栄太郎は咄嗟にその受話器を取り上げていた。そんな栄太郎を高橋係長はニヤニヤしながら眺めていた。

電話交換手の女性は「生活福祉課へ外線です」と告げた。

「はい、生活福祉課ですが……」

「こちら、ひまわり調剤薬局と申しますが、いつもお世話になっております」

「はい、こちらこそお世話になっております」

「佐々木健一様の三月二十八日分の調剤券が未到着なのですが……。受給者番号を教えてくださいませんか？」

（調剤券？ 受給者番号？ 一体なんだそりゃ……？）

栄太郎にはわからない言葉ばかりだった。

「あ、あのー、調剤券というのは……？」

栄太郎が自信なさげにそう言うと、相手はムツとした口調になり、「話のわかる方をお願いします」と言った。栄太郎はオロオロしながら、高橋係長の方を見た。

「どこの調剤薬局からで、誰の分だ？」

「ひまわり調剤薬局からで三月二十八日の佐々木健一さんの分だと言っています……」

「それなら、昨日発送している。確か塩田小児科の分だったな。今



日か明日には調剤券が届くと言っておけ」

「係長、電話変わってくださいよ。僕じゃまだわからないことだらけで……」

「馬鹿！ 自分で取った電話だろう。甘ったれるな！」

高橋係長は栄太郎を一喝した。栄太郎は渋々、受話器に向かった。「済みません。調剤券は昨日発送したそうです。今日か明日のうちには届くと思うのですが……」

「うちは受給者番号が知りたいんです。基金に請求するのに……」  
相手が電話口で苛ついているのがわかった。栄太郎の受話器を握る手にじつとりと脂汗が滲み、思わず受話器を落としそうになる。

「先方は受給者番号を知りたいそうです」

栄太郎は自分が子どもの遣いのように思えてきた。

「それは調剤券で確認するのが筋だ。調剤券は確実に届くんだから、それで確認しろと伝える。受給者番号はみだりに教えるものじゃない」

「はあ……」

栄太郎は仕方なく、「受給者番号は調剤券で確認してください」と言った。すると、相手は「いつもなら教えてくれるのに……。いづから福祉事務所はそんなに不親切になったのかしら」と不満を漏らしながら、電話を切った。

栄太郎は受話器を置くと、それは脂汗でじつとりと濡れていた。

「ふふふ、早速、手痛い洗礼を受けたようだな。まあ、こんなのは序の口だ。どうだ、電話が怖くなっただろう？」

高橋係長が面白そうに笑った。栄太郎は心の中で「笑い事じゃない」と思いながら、「調剤券とか、受給者番号って何ですか？」と高橋係長に尋ねた。

「生活保護の場合、社会保険は別だが、国民健康保険には加入できないからな。まず被保護者が医療機関にかかる場合は、変更申請書という書類を提出し、受診券を持って医療機関に行くことになる。その変更申請書を元に我々は医療決定という行為を行うんだ。医療

決定が為されると、医療機関には医療券が、調剤薬局には調剤券がそれぞれ発行される。それに基づいて医療費や調剤費の請求をするわけだ。被保護者一人一人には受給者番号というのが付けられていてな。先に受給者番号を教えてしまうと、不正な請求なども起こり得るんだ。まあ、こちらに落ち度があつて医療券や調剤券の発行が遅れた場合、医療決定が為されていれば教えるケースもあるがね……」

高橋係長は腕組みをしながら滔々と述べた。栄太郎は「はあ」と頷きながら、聞くしかなかった。

四月三日は生活保護費の支給日だった。大半の者は銀行振り込みになつていたのだが、どうしても窓口支給をしなければならぬ人たちも多いという。それは生活上の指導をしたり、支給日にしかなかなか会えない人いたりするからだ。

栄太郎は初めての支給日で圧倒されていた。それは押しかける人の山だった。

「はい、順番、順番。受給者証と印鑑をご用意ください！」

戸沢という職員が大きな声で言った。

「城所さん、まだ仕事はみつからないの？」

戸沢が城所という被保護者を睨み付けた。

「職安には行つていますがねえ。この不況じゃ、へへへ……」

城所は笑つて誤魔化す。だが、戸沢は「酒臭いね」と言うと、出したかけた保護費の袋を引つ込めた。

「そりゃあ、ないですよ」

「昼間から酒臭い息を振り回している奴がまともな仕事に就けると思つか？ 今度、酒などやったら、生活保護を打ち切るぞ！」

戸沢は城所を一喝した。それでも渋々、戸沢は保護費の入った袋を城所に渡す。城所は卑屈な笑いを浮かべて書面に印鑑をつく。そんな様子を栄太郎は呆気にとられながら眺めていた。

「ほら新人、お前もボーツと突つ立つてないで、手伝つてくれ」

戸沢にそう言われ、栄太郎もカウンターの椅子に座った。栄太郎の前に怒涛のように被保護者がなだれてきた。

その日の晩は生活福祉課の歓送迎会だった。無論、栄太郎は主賓扱いであるのだが、どこか、馴染めずにビールを啜っていた。栄太郎の隣には高橋係長が座っている。

「ようどうだ、生活福祉課は？」

したたか酒に酔った高橋係長が栄太郎にもたれかかって、ビールを注いだ。

「はあ、実はまだよくわからないんです」

「わからなくて当然だ。この道三十五年の俺にだって、まだ迷うところがあるんだ」

「高橋係長がですか？」

「だから、そこが面白いんじゃないか。生保の仕事はのめり込むか、嫌になるかのどちらかだ。俺はずっぽりとのめり込んだね。ケース（被保護者）の中には確かにあくどい奴もいる。嘘つきも多い。しかし、どんな人だってそれなりの理由があって、保護に転落しているんだ。まずは自分のケースを信じる。それがケースワーカー（地区担当員）の出発点だ。そして何故、嘘をつかねばならないかを考えていくんだ」

高橋係長は熱く語った。周囲の課員たちは「また始まった」と言いたげな顔をして苦笑していた。

「はあ、そんなもんですか……」

「何しろ、この仕事の面白さはケースに心から感謝されることもあるといところだ。そりゃ、不満や文句を言われることも多いよ。だが、時には心から感謝されることがある。そこに喜びを見出せば、この仕事は決して辛いものではない」

「感謝に対する喜びですか……」

栄太郎が頷いた。すると、赤い顔をした戸沢が「よう、新人、頑張れよ」とビールを注いでくれた。

「俺は先日、ダメ元で扶養照会を親族に出したんだがな、今まで父を探していたって泣いて喜ばれてなあ。あの時は気持ちよかった。新人、お前にもきつとそういう時がくるぞ」

戸沢は呂律の回っていない口調で、そう言った。

「みんな、それなりに苦労はしているが、この仕事に遣り甲斐を見出していることは確かだ」

高橋係長は自信たっぷりと言った。

栄太郎は金色の泡を見つめると、一気に流し込んだ。

「だから、あんたじゃ話にならないんだよー！」

栄太郎が生活福祉課に配属されて一週間が過ぎようとしていた。

幾度となくケースからそんな言葉を浴びせられただろう。だが、栄太郎は「お調べして、再度お返事します」と言って退けるまでになっていた。無論、高橋係長のサポートがあつてこそこの話であるが……。まだまだ、栄太郎には理解不能な言葉や仕組みが生活保護の業務には存在していた。それでも、前に進まねばならない栄太郎であった。

そんな栄太郎でも、この仕事はつくづく「孤独」だと感じたものである。確かに高橋係長は的確なアドバイスをしてくれる。他の課員も時としては事務処理などを教えてくれた。だが、矢面に立たされるのはいつも栄太郎一人なのだ。「自分のケースのことは自分で処理しろ。責任は上取る」と高橋係長は常々言っていた。その言葉を噛み締めながら、今日も家庭訪問に出掛ける栄太郎であった。

生活保護は最低生活を保障するとともに、自立の助長をその目的に掲げている。その目的のためにも定期的な家庭訪問を実施して個々の世帯の問題を把握することは必要不可欠なのだ。家庭訪問の頻度は問題が多ければ毎月となり、少なければ三ヶ月ないしは六ヶ月に一度となる。中には家庭訪問に拒否的な世帯もあったが、大多数が仕方なく受け入れてくれた。生活保護の地区担当員が財布の紐を握っていると思えば、家庭訪問を受け入れざるを得ないのが実情だ。

その日、栄太郎は矢口シズと高山真治という高齢のケースを訪問する予定だった。高山真治はいつも市役所の窓口で保護費を受け取っているのだが、今月は支給日に来なかった。支給日以降、電話連絡を取っているのだが、一向に繋がらない。安否確認を兼ねての家庭訪問であった。

栄太郎はまず、矢口シズのアパートへと公用車を走らせた。アパートの前に車を止めると、栄太郎は矢口シズの家扉をノックした。呼び鈴はついていなかった。ノックをするが返事がなく、沈黙したままだ。栄太郎はもう一度ノックすると、「済みませーん。福祉事務所の北島です！」と大声で呼んだ。

すると、扉が少し開き、中から仏頂面をした老婆が顔を出した。「ちよつと、あんた……。家の前で『福祉事務所』なんて言うんじゃないよ。それに市のマークを付けた車を前に堂々と置いて。これじゃあ、私が生活保護を受けているってことが周囲にバレるじゃないか。私にだってプライドがあるんだよ」

「あ、どうも済みません……」  
栄太郎は心の中で「しまった！」と思った。高橋係長は「ケースは多かれ少なかれ、生活保護を受けていることにステイグマ（恥の意識）を感じている」と言っていた。そのステイグマを今、栄太郎は矢口シズに突きつけてしまったのだ。シズが怒るのも無理はないと思う栄太郎であった。

「どうも済みませんでした。お変わりはございませんか？」

「柳沢内科に定期的にかかっているよ。変わりはないね」

「あの、息子さんから連絡は……」

だが、矢口シズはそれには答えず、ボタンと扉を閉めてしまった。  
（あーあ、失敗したなあ……）

栄太郎の心はしよげ返っていた。栄太郎は力なく、公用車のドアノブを引いた。一度の失敗でよくよしていることは許されなかった。次には真治のところに行かねばならない。栄太郎は公用車のバ

ツクミラーで曲がったネクタイを直すと、勢い良くキーを回した。少し整備の悪い公用車はプスプス音を立てる。栄太郎はハンドルを切った。

高山真治の家はシズの家からも程近い。車で三分くらいの距離だろうか。古ぼけた平屋の一戸建てに住んでいた。栄太郎は同じ失敗を繰り返すまいと、高山真治の家から少し離れた空き地に車を停めた。

高山真治の家にも呼び鈴がない。玄関の扉をノックする。しかし、返答がなかった。幾度か扉をノックするが家の中は沈黙したままだ。「居留守を見極めるには電気メーターを見る」

先輩の田所から栄太郎はそう教わっていたので、電気メーターのある家の裏側に回った。

電気メーターは勢い良く回っていた。ということは、今も高山真治の家の中でかなりの電気が使用されているということだ。栄太郎は慎重に、家の周囲を回った。すると、曇りガラスに大粒のハエがコッソ、コッソと当たっている部屋があった。そして、魚が腐ったような腐敗臭が栄太郎の鼻先を掠めた。

「これは、もしかして……」

栄太郎は携帯電話を弄った。高橋係長の前に置かれている電話は内線電話ではなく、直通電話だった。ケースにはその番号を知らせてはいないが、栄太郎のような地区担当員や県の本庁など、ごく一部の関係者には知らされていた。栄太郎は携帯電話からそのホットラインに電話を掛ける。

高橋係長はすぐ電話に出た。栄太郎は電気メーターが勢い良く回っていること、曇りガラスに大粒のハエが当たっていること、そして、変な腐敗臭がすることを高橋係長に告げた。

「間違いないな。確実に死んでいる」

高橋係長はサラッと行って退けた。

「ど、どうすればいいんですか？」

「まず、大家と駐在に連絡を取れ。間違っても第一発見者にはなるんじゃないぞ。踏み込むのは警察の役目だ。大家には鍵を持ってきてもらえ。今から大家と駐在の電話番号を教えるから、すぐに連絡を取れ」

栄太郎はメモの用意をした。

駐在はすぐに来てくれた。駐在は曇りガラスに当たる八工と腐敗臭を嗅いで、「間違いないですね。この臭いは死んでいますね」と言った。大家は少し離れたところに済んでいて、二十分後くらいに鍵を持って現れた。駐在が鍵をもらって中へ踏み込んだ。栄太郎と大家は外で待機していた。

「うわー、こりゃ酷いなー！」

駐在の聲が家の中から響いた。

程なくして出てきた駐在は、顔をしかめながら、「大分、腐敗が進んでいますよ」と言った。

「すぐに帰帆警察署の方に連絡を取りますので、鑑識が到着して片付けるまで、中には入らないください。ところで、通報したのはあなたですか？」

「はい」

栄太郎は駐在の瞳を見て答えた。

「福祉事務所でしたね。名刺あつたら、見せてもらえますか？」

栄太郎は名刺入れから名刺を取り出すと、駐在に渡した。

「この職に就いてどのくらいになります？」

「この四月に異動したばかりなんですよ」

「高山真治さんと会ったことは？」

「ないです」

「後で仏さんの身元確認をしてもらいますので、親族にでも連絡を取ってください」

「それが、高山さんには身寄りがないんですよ。従兄弟とかも音信普通で……、協力は望めないかと思えます」

「じゃあ、前の担当は？」

「所内にいます。田所という者が前任でした」

「じゃあ、その田所さんにも連絡を取ってください。高山さん本人かどうかの身元確認をしますので。あ、今じゃなくていいですよ。仏さんの傷み具合が酷いんでね、署の方で洗浄してから確認してもらうことになると思いますから」

駐在はこのようなケースを幾つも見てきたのだろうか、サバサバとしていた。

「いやー、電気ストーブが付けっ放しでしたよ。だから、腐るのも早かったんですねえ。まあ、まともに見られない遺体ですよ」

栄太郎は電気メーターが勢い良く回っていたことを思い出した。

程なくして帰帆警察署より生活安全課の刑事と鑑識が到着した。

鑑識は家の中に入り、刑事は駐在から状況を聞いている。

家の中から「ウエーッ」とか「グワッッ」とかいう絶叫が響いた。栄太郎は鑑識が嘔吐したのだと気付くのには時間はかからなかった。

高橋係長から言われたのだろう、田所が応援に駆けつけてくれたのは、栄太郎にとって救いだった。

「あー、いつも保護費はイの一番に取りに来るじいさんだったのになあ」

田所はしかめ面をしながら呟いた。

栄太郎の鼻には死臭がこびり付いていた。だが、不思議なことに、まだ高山真治が死んだという実感が湧かなかつた。ブルーシートに被せられた遺体が運び出された時にも、まだ人の死が実感出来ずにいた。

「映画やドラマじゃ、人の死は綺麗に描かれることが多いが、これが現実だ」

田所がやるせない顔で言った。

「おかしいな。確か身元確認があるはずだが……」

田所が鑑識の車を覗き込んだ。



「それは警察署の方で行うと言っていましたよ。何しろ遺体の傷み具合が酷いらしく、洗浄するそうです。田所さんにもご足労願うことになるって……」

「ウエーッ、そんなのを見なきゃならんのかよ。だったら今、やって貰いたいな。まあ、警察がそう言うんじゃないか……」

田所が嫌悪感丸出しで、そう言った。栄太郎は鑑識の車に乗せられ、ブルーシートを被せられた遺体を見つめた。鑑識はさも嫌そうにバックドアを閉めた。

刑事が栄太郎と田所のところに寄ってきた。

「今日の二十時くらいに警察署の方まで来てもらえますか？　そこで身元確認をしてもらいますので……」

栄太郎も田所も「はい」と頷くしかなかった。

「じゃあ、我々はこれで引き揚げます。家の中はウジムシとハエだらけですよ」

警察はそう言って、引き揚げていった。

田所は自分が乗ってきた公用車のバックドアを開けると、「これから一仕事だぞ」と言い、長靴とマスクを取り出した。長靴もマスクも二セットある。田所はその一組を栄太郎に渡した。

「これから、どうするんですか？」

「まずはムシを片付けなきゃならんだらう」

「そんなことまで福祉事務所がするんですか？」

「ほら、あつちで大家さんが恨めしそうな顔をしているぞ。俺たちがやらなきゃ誰がやるって言っただ。まさか大家さんにそこまでやらせるわけにはいかないだらう」

田所の手には箒と塵取りが握られていた。仕方なく、栄太郎も長靴を履き、マスクを着用する。田所から箒と塵取りを栄太郎は受け取った。田所は公用車に積み込んであった粉石けんと、洗濯用洗剤をブレンドしていた。

「どうするんですか、それ？」

「これを撒くとね、ムシが集めやすくなるんだ。ムシを箒と塵取り

で集めて棄てるにはこれが一番なんだ。そのままじゃ、意外とムシはモゾモゾして集められないんだよ」

そう言うと、田所はジヨウロに何やら液体を入れる。

「それは何ですか？」

「消毒用アルコール。ムシを棄てた後に撒くんだよ。年に何件かはあるんだよ。こういうケースが……。こちらも慣れたもんさ」

田所は洗剤とジヨウロを抱えると、そそくさと家の中に入っていた。栄太郎も後に続く。

「うわっ、こりゃ酷いな……」

鑑識が引き揚げた部屋の中を見て、田所が開口一番、そう呟いた。その部屋の中にはまだ腐敗臭が強く残っていた。そして、畳の上で無数に蠢くウジムシたち。敷かれていた布団は真治の体液だろうか、真っ黒に汚れており、それが畳まで流れ出し、乾いてガビガビになっていた。部屋の中には大きく育ったハエが無数に飛んでいた。

田所はまず、窓を開けると、五月蠅いハエを追っ払っていた。だが、ハエは腐敗臭にしがみつくと、なかなか出て行かない。

「仕方ない。布団を上げるぞ」

田所が布団を撥ね退ける。その下には更に無数のムシたちが蠢いていたのである。栄太郎の胃は腐敗臭と無数のウジムシで反芻を始めていた。

「これが、人の死……」

「そうだ。これが孤独死の現実だ」

田所は手際よく洗剤を撒いていく。栄太郎がそれを箒と塵取りで集め、ビニール袋に棄てていった。確かに粉石けんと洗濯用洗剤をブレンドしたものを撒くと、ムシの動きは鈍った。箒で掻き集めると団子状になり、処理しやすかった。田所は大きめのビニール袋に布団を詰めていた。

「畳も取り替えないとダメだな。これじゃあ、敷金で賄いきれないぞ」

「そういう場合は、どうなるんですか？」

「大家さんに泣いてもらうしかない。生保は死んだ人には金は出せないんだ。まあ、家の片付けくらいはやってやるようだな。それがせめてもの誠意だ」

ムシを片付け終わるのにそれほど時間はかからなかった。これも田所の気配りがあつたからこそである。

大家は家に足を踏み入れることなく、外で待っていた。

「取り敢えず、ムシは片付けました。後日、家の片付けには改めて来ます」

大家は不安げな表情を隠せなかった。

「ああ、また高齢の独り身かい。うちではこれで三件目だよ」

「畳みは取り替えないと、ダメかもしれないね。それは敷金で賄ってください」

田所が大家に言った。

「この家のハウスクリーニングは敷金じゃ賄いきれないよ」

「うちもお金を出す根拠がないんです。家の片付けはしますので、それで勘弁してください」

「今後は生保のお客さんは断ろうかな……」

大家のその言葉に栄太郎と田所は顔を曇らせた。

「そう言わないでくださいよ。家の片付けはできるところまでしますから……」

田所が懇願した。しかし、大家は憮然とした顔を崩さず、「今後、保証人は必要だね」と言った。

市役所に戻つた栄太郎は自動販売機で缶コーヒーを買って、それを一気に煽った。

「ふう……、今日は何が何だか……」

そんなため息が自然と出る栄太郎であつた。

栄太郎がデスクに戻ると、高橋係長が待ち構えていた。

「どうだった、初めての孤独死は？」

「凄惨でした。あんなことが年には何件かあるそうですね」

「そりゃ、この仕事をやっていけば、ぶち当たるさ。それはそうと、葬儀屋の辰巳屋から連絡があったぞ。葬祭扶助の範囲内でやってもらうよう依頼しておいたが、念のため、北島からも連絡しておいてくれ。見積もりと請求書は葬儀一式でまとめてもらった。間違っても焼香セツトなど書き入れないように言っておいてくれ。ドライアイス代は実費で出せるから、明細の中に書き込んでもらっても構わない」

「えーと、ドライアイス代は実費と、他は葬儀一式でまとめてもらうんですね」

栄太郎がメモ用紙にペンを走らせた。

「それから、民生委員の熊沢さんに葬祭の執行者になってもらえ」「何故、民生委員が葬祭の執行者になるんですか？」

「本来は親族がなるべきところなんだが、高山真治の場合、従兄弟しかいないからな。それも隣の持立市に住んではいるが、絶縁状態だ。そんな従兄弟に葬祭の執行を頼めるわけがないだろう。親族が葬祭の執行者になる場合で葬祭扶助を適用する場合は、その親族を生保にかけるということだ。死んだ人間には保護費は出せないからな」

「じゃあ、親族の要否判定が必要ということですか？」

「その通りだよ。今回は従兄弟だし、葬儀はうちでやらざるを得ないだろうな。そうなった場合、生活保護法第18条2項2号の規定によるんだが、民生委員にお願いするのが妥当だ。まあ、名義だけ貸してもらおうようなもんだ。熊沢さんの生年月日を確認しておけよ。葬儀屋に聞かれるからな。それと、遺骨だけは従兄弟に引き取ってもらえ」

栄太郎は生活保護手帳を開いた。そして「ふーん」と頷いて、受話器を取った。

その日の二十時過ぎ、栄太郎と田所は帰帆警察署にいた。高山真治の身元確認のためである。

「いやー、まともに見られたご遺体ではなかったですよ。一応、洗  
浄はしましたけどね」

刑事は顔をしかめて言った。

「死因は何だったんですか？」

田所が尋ねる。

「検案ではくも膜下出血とある。いわゆる脳卒中ですな」

「そういえば、血圧が高かったですからねえ、この人……。まあ、  
行政解剖にならなくて、お互いよかったですね」

田所が笑った。刑事もホツとしたような顔をしている。

「行政解剖って何ですか？」

その意味がわからない栄太郎は、率直に尋ねた。

「孤独死の場合は不審死扱いとなるんですわ。検案で死因が特定で  
きず、事件性がある場合は司法解剖に回され、事件性がないと判断  
された場合は行政解剖に回されるんです。司法解剖の場合、費用は  
警察持ちですが、行政解剖の場合は親族負担となります。そこで  
いつも福祉事務所と揉めるんですわ」

刑事が照れくさそうに頭を掻いた。

刑事は遺体が安置してある部屋へ二人を案内すると、遺体に被せて  
あるブルーシートを剥ぎ取った。

「！」

栄太郎は思わず息を呑んだ。

高山真治の遺体に眼球はなく、身体の左半身が腐って溶け、腹に  
はぼつかりと穴が開いていた。そして、右半身はまるでミイラのよ  
うだ。栄太郎はまるで、ホラー映画の世界に自分が飛び込んだよう  
な錯覚を覚えた。

「間違いなく、高山真治です。この白髪と無精ひげが特徴です」

田所が遺体を見て言った。

「いやー、ご足労ありがとうございました。時々あるんですよえ。  
こういう遺体が……。ウジムシって奴はまず目玉から食っていくん  
です。身体で一番柔らかいところですからね。そして、腐った内臓

へと食い進んでいく。この人の場合、左を下に倒れていましたからね。布団と密着した部分は腐って、右半身はミイラのようになってしまうでしょう。電気ストーブが付きっ放しっていうのも、腐敗を促進させ、半分ミイラ化させる大きな要因だったんでしょね」

その刑事の話の聞いて、栄太郎は嫌悪感を催し、身体が震えるのがわかった。

「おい、身体が震えているぞ。怖いのか？」

栄太郎の様子を見て、田所が言った。だが、栄太郎は何も口に出来なかった。何を喋っていいのかわからなかったのである。

「俺なんか、死んだ人間より、生きている人間の方が怖いね。今にあんたにもわかるよ」

田所はそう言つと、背中を向けた。栄太郎はただただ呆然と遺体を見つめていた。

「だから、葬儀は福祉でやりますから、遺骨だけでもお引取りをお願いしたいんです！」

翌朝、栄太郎は電話口で声を荒げていた。電話の相手は高山真治の従兄弟だった。

「そんなこと言ってもね、今更他人だよ、あいつは……」

「遺骨だけは福祉事務所で処理できないんですよ」

「だったら、球磨川にでも散骨すればいいでしょう。あいつは身内を連帯保証人にして借金を重ねまくったんだ。こっちは被害者だよ。あんな奴、のたれ死んだってこっちは一向に構わないさ。これ以上は話の無駄だから、電話を切るぞ」

「ちょ、ちよつと待ってください……」

だが、受話器からはプープーという音が空しく流れるだけだった。栄太郎は「はあ」とため息をつくつと、事務椅子の背もたれに寄りかかった。

「ダメだったか……」

高橋係長が唸るように呟いた。

「どうだ、俺は灰皿のあるところで一服するぞ。お前も付き合わんか？」

高橋係長にそう言われ、「いや、僕は煙草を吸いませんで」と言った栄太郎だったが、高橋係長は「ここでは話せないことがある」と言つて、無理矢理栄太郎を誘つた。

煙草を吸わない栄太郎を、高橋係長しつこくが煙草に誘つたのには理由がある。健康増進法が適用されてからというもの、庁舎内では煙草が吸えなくなった。灰皿は市役所の表玄関と裏口にある。職員が利用するのはもっぱら裏口だ。高橋係長はヘビースモーカーだった。一時間おきに煙草で席を立つくらいだ。もつとも、本人に言わせれば気分転換をして、効率よく仕事をしているのだとか。高橋係長が地区担当員を煙草に誘うことは、そう珍しいことではない。事務所の中ではどうしても肩書きに縛られ、教科書どおりの答えしか返せない時がある。しかし、こうして煙草を吸いながらの雑談ならば違う。本筋からは外れるが、仕事の裏技などを教えられるのである。

市役所の裏口に灰皿は設置されている。その前で高橋係長はさも美味そうに煙草を吸つた。紫の煙が立ち昇つた。栄太郎は缶コーヒを片手に、高橋係長を眺めている。

「やっぱり、無縁仏かなあ……」

高橋係長が煙を吐き出しながら呟いた。

「無縁仏……ですか？」

「ああ、遺骨の引き取りは親族にお願いするのが筋だが、高山真治の生活歴を見ると、とても従兄弟に遺骨の引取りを無理強いするのは酷かもしれんな。従兄弟は相当、恨んでいるぞ」

「そういう場合は無縁仏に埋葬するんですか？」

「ああ、成願寺つていう市にも所縁のあるお寺さんがあつてな。こつういうケースはその無縁仏に依頼している。だが、その成願寺にも良い顔されないんだよ。まあ、厭味一つ言われるのを覚悟の上で、

成願寺にお願いするしかないか……」

高橋係長がやるせなく煙を吐き出した。栄太郎は少し缶コーヒを啜る。

「はあ……」

二人から出るのはため息ばかりであった。

翌日の午後、高山真治は茶毘に付された。火葬に立ち会ったのは葬儀屋の辰巳屋を除けば、栄太郎一人である。栄太郎は遺骨を抱えて、成願寺へと向かった。

成願寺では住職が、さも嫌そうな顔をして待ち受けていた。

「本当は永代供養料が必要なんだけどね」

住職にそんな厭味を言われながら、栄太郎は遺骨を住職に引き渡した。果たしてこれで高山真治の魂が救われたのかどうか、栄太郎にはわからなかった。だが、そこに人の死に対する尊厳が存在していないことだけは確かであった。



## 混沌

高山真治の家の片付けは、生活福祉課から総勢五名を駆り出して行われた。トラックで荷物を運び出し、市の焼却場へ何往復もする大変な作業で、丸一日かかった。栄太郎はこんなことまで生活福祉課がやらなければならないのかと、正直なところ思ったりもした。だが、田所に言わせれば、「他にやる人がいんだから、しょうがないだろう」とのことだった。

栄太郎が市役所に戻ると、デスクの上にある内線が鳴った。正直なところ、疲れていたので、電話を取る気にはなれなかったが、こればかりは仕方がない。

「はい、生活福祉課の北島です」

もう十七時を回っていたので、警備員が電話交換をしていた。

「北山さんに民生委員の熊沢さんから外線です」

「もしもし、北島ですけど」

「ああ、私だ。民生委員の熊沢だ」

「この度、高山さんの件では、ご迷惑をお掛けしました」

「いえいえ、これも民生委員の仕事ですよ。それより北沢さん、高津栄子が二カ瀬町のスナック『マリ』でこっそり働いていますよ」

「ええっ？」

その話は信じられるものではなかった。高津栄子は大腸癌を患い、ストマ（人工肛門）を付けており、身体障害者手帳の4級を所持していたのである。そんな高津栄子が働けるとは思ってもみなかった栄太郎であった。

「いや、本当なんですよ。先日、民生委員の集まりで二カ瀬町へ行きましてね。その晩、そのスナックで飲んだんですわ。そうしたらいたんですよ、高津栄子が……。『澄子さん』なんて呼ばれていましたけどね、あれは源氏名でしょうね」

熊沢民生委員はさも嬉しそうに言った。生活保護の不正受給を暴

いて得意になっている様子だった。

「有力な情報、ありがとうございました。早速、調査してみます」  
電話を切った栄太郎は、熊沢民生委員からの情報を高橋係長に伝えた。

「田所と早速、実地調査に行つてこい。もし、本当に高津栄子だったら、明日、ここに呼び出すんだ」

二力瀬駅は市役所の最寄り駅である帰帆駅から三つほど下った駅である。二力瀬町はこの帰帆市に隣接する町で、笹熊郡の町である。栄太郎と田所は二力瀬へ電車で移動した。高津栄子がいなければ、スナックで一杯引つ掛ける算段であった。

「係長はよく『まずはケースを信じる』と言つが、この仕事やっていると、段々、人間不信になってくるぞ」

田所は二力瀬に着く前の長いトンネルの中で、唸るように言った。  
高津栄子はいかにも真面目そうで、控えめの女性だった。

「もし、高津栄子がスナックで働いていたら……？」  
「その時はその時だ……。相手の出方にもよる。何せスナックなんかで働かれると、まず課税調査なんかでは引つ掛からない。今回みたいなタレコミがなきゃ……。それだけ確信犯の可能性が高いんだよ」

電車はトンネルを抜けた。もう二力瀬は目前であった。栄太郎は自分の気を引き締めるように、ネクタイを締めなおした。

スナック「マリ」は二力瀬駅を降りて、寂れた銀座通りを抜けたところにあつた。

「ここだ……」

看板を見た栄太郎がネオンを指差す。スナック「マリ」は、いかにも場末のスナックといった様相を呈していた。

ギーッと建て付けの悪い扉を引いて、田所に続き、栄太郎が中に入る。

「いらつしゃい……」

中にいた中年の女性の顔が凍て付いた。

「高津さん、これはどういうことですか？」

田所が高津栄子を睨みながら言った。栄太郎は呆けた顔をしていただろうか。

「やだ、私は『澄子』よ」

取り繕った高津栄子が、苦笑いを浮かべる。

「ほう、高津さんに双子の姉妹がいたことは知らなかったな。戸籍にも載っていなかったっけ……」

「はいはい、私が悪うございましたよ。辞めればいいんですよ。辞めれば」

開き直った高津栄子は、煙草を啜えると、おもむろに火を点けた。「そういう問題じゃないですよ。明日の十時に市役所の方まで来ていただけますか？ 来なかったら、あんたを詐欺罪で告訴するつもりですので、そのところよろしく」

そう言うと、田所は踵を返した。高津栄子は「待つて！」と叫び、カウンターから出てきて、田所の袖を引っ張った。だが、田所は無情にも、その手を払った。

「こんなところじゃ、まともに話せないだろう！」

田所は怒りを露にし、外へと出ていった。高津栄子はその場にガクツと倒れこむようにして座った。

「高津さん、どうしてこんなスナックで働かなければならなかったんですか？」

栄太郎は腰を落とし、高津栄子の目線に合わせる。

「あら、『こんなスナック』で悪かったわね」

奥から、仏頂面のママが啜え煙草で出てきた。栄太郎はバツの悪そうな顔でママを見上げた。

「この人はね、昔、棄てた息子さんに仕送りをしてやっているんだよ。私だって知っているよ。この人が生活保護を受けていることも、人工肛門を付けた障害者だってことも。でも、それを承知の上で雇ったのさ。この人の情にほだされたのさ」

「うっーっ……！」

高津栄子が泣き崩れた。栄太郎には自分に何ができるかわからなかったが、高津栄子の肩に、そっと手を当ててやった。高津栄子はオイオイと号泣している。

「じゃあ、明日の十時、市役所で待っていますよ」

栄太郎はそう言い残してスナックを出た。外では田所がつまらなさそうに煙草をふかしていた。

「ナナハチだな、ナナハチ……」

田所は煙を吐き出しながら、つまらなさそうに言った。

「ナナハチって何ですか？」

「生活保護法第78条。つまりは不正受給に対する費用の徴収だ」「費用の徴収ですか……」

「そう、ロクサン（生活保護法第63条による費用の返還）や地方自治法施行令第159条による戻入などと違って、資力があるかどうかは問題ではない。強制的な費用の徴収だ」

そう栄太郎に説明すると、田所は携帯灰皿に煙草をなすりつけた。「あのオバサンだけは信じていたのにな。また裏切られたぜ。本当、人の性は悪だな。北島、明日の朝、係長とよく相談するんだな。裏口の灰皿の前で……。さて、駅前の居酒屋で一杯引っ掛けて帰るか」田所が夜道を歩き出した。栄太郎は「はい……」と言うと、田所の後に続いた。栄太郎の心の中で高橋係長が言っていた、「何故、嘘をつかなきゃいけないのか。その裏を読み取れ」という言葉を思い返していた。

翌朝の八時半、市役所の裏口の灰皿の前に栄太郎と高橋係長の姿を見ることができた。

「そうか、やつぱりスナックで働いていたか……」

高橋係長が紫色の煙りをくゆらせながら呟いた。

「でも、小さい頃に棄てた息子さんに仕送りするためだと言っていましたよ」

「北島、この仕事は人情を忘れてはいかん。だが、その前に守らねばならないものもあるんだ」

「はあ……」

栄太郎は頭を掻きながら、高橋係長の真意を探っていた。

「今回の件は、見てしまつたからには仕方ないな」

「やつぱりナナハチですか？」

「それも一つの方法だ」

高橋係長がにんまりと笑つた。

「では、他にどんな方法があると……」

「どうせ、スナツクなんか課税調査でも上がつてこないんだ。厚生労働省や会計検査院の目は誤魔化せる」

「と、言つと……？」

栄太郎が高橋係長の瞳を覗き込んだ。

「ナナハチ扱いはせずに、上手く話をまとめて、保護の辞退届けを提出させるといふ方法もある。それも一つのけじめのつけ方だ。まあ、裏技だけだな。厚生労働省はすぐにナナハチをかけると言ってくる。何しろ国庫が四分の三の法定受託事務だからな、生保は。ただ、このくらいの裁量が福祉事務所にあつても良かるう」

「果たして今後、やつていきますかね。高津栄子は……」

「その代わり、費用の徴収はないんだ。どっちが得か、高津に考えさせるのもいいだろう。何しろ、不正受給は告訴も辞さないというのが、今の厚生労働省の見解だからな。ただ、スナツクの給料なんていい加減だろう。ナナハチをかける際、不正受給額の認定をするのが、すごく面倒なんだ」

高橋係長は灰色の煙をフーツと吐き出した。そして、短くなつた煙草を灰皿に押し付ける。

「まあ、高津が来たら、俺も一緒に面接室に入つてやるよ」

「お願いします」

栄太郎は高橋係長に深々と頭を下げた。高橋係長はそんな栄太郎の肩をポンと叩くと、三階の事務所へと戻つていった。

高津栄子は十時には市役所に来た。大分、しよげ返った顔をしていた。普段は品の良い中年女性を演じている高津栄子であったが、この時ばかりはやつれて見えたものである。

高橋係長が栄太郎に目配せをして席を立つた。栄太郎も席を立つ。こうして三人は面接室へ向かったのである。

「今回は明らかに不正受給ですな」

高橋係長が腕組みをして、高津栄子を睨んだ。その眼力たるや凄まじいものがあつた。栄太郎はメモ用紙にペンを走らせている。

「済みませんでした……」

高津栄子がおらしく言う。

「我々としては、あんたを告訴した上で、費用を強制的に徴収することもできるんです。まあ、釜戸の灰まで我々の物つていうことですな」

それは脅し文句に近かつた。高津栄子はただただ恐縮し、小さくなっていた。

「本当に……済みませんでした……」

高津栄子がハンカチで目を拭った。

「まあ、我々としては提案が二つあるんですよ。一つは不正受給として処理するか。もう一つは保護を辞退してもらうか。不正受給として処理する場合はきっちり不正受給額を認定して、徴収させてもらいますからね」

「でも私、生保がないとやっていけないんです！」

「我々は働くことが悪いと言っているんじゃない。隠れて働き、不正に保護を受けていたことが許せないんです。そりゃ、小さい頃に棄てた息子さんに仕送りをしたい気持ちはわかりますよ。だが、生保は仕送りをするための制度じゃないんだ。国民、市民の税金で賄われているんだ。そのところを理解してもらわなきゃ困りますよ。息子さんだって、そんなお金を貰っても困るでしょう」

「うづうづーっ……！」

高津栄子が泣き崩れた。高橋係長は腕組みをしたまま、その様を見下ろしていた。栄太郎は神妙な顔をして高津栄子の髪を眺めていた。

どれほど、高津栄子は泣き続けただろうか。だがある時、むっくりと顔を上げた。

「いいですよ。保護は辞退します。どうせ、私みたいな障害者はいつの世だって見捨てられるんです」

「ふざけないでください！」

怒鳴ったのは栄太郎だった。

「障害者だろうが健全者だろうが、悪いことは悪いことなんです！障害を笠に着て不正受給をするなんてもつての他ですよ。そんな捻じ曲がった根性だから生保に転落するんです。だったら性根を入れ替えて、自分ひとりで自立してみせてくださいよ」

栄太郎の心の中は煮えくり返っていた。

高津栄子は無然とした表情をし、「辞退届けってどう書けばいいんですか？」と言った。

「書くんですね。本当に辞退届を書くんですね？」

栄太郎は高津栄子の瞳を真っ直ぐに見つめた。そこへ高橋係長が一枚の白紙を差し出す。生活保護の辞退届は様式があるわけではない。ケースが任意で書くものである。

「ここに『帰帆市福祉事務所長殿、私は就労して自立しますので保護を辞退します』と書いてもらおうか。最後に日付と署名、それに印鑑だ。いいか、あんたは自分の意思で保護を辞退するんだぞ。間違っても我々が強要したわけじゃない」

「わかっています。今後、どんなことがあっても生活保護は申請しません。その代わり徴収はないですよね？」

高津栄子が白紙にペンを走らせた。高橋係長は「うむ」と頷いた。

自分のデスクに戻った栄太郎は高津栄子のケースファイルを取り出すと、辞退届を挟んだ。さすがに高橋係長も「ふう、お疲れさん」

と栄太郎に声を掛けた。そして、「お前の本音、しっかり聞いたぞ」と笑った。栄太郎は高橋係長に「ありがとございました」と頭を下げた。

「高橋係長は僕のことをシゴクなんて言っていましたけど、結構優しいじゃないですか」

「あははは、そうか？ 俺も『鬼の高橋』から『仏の高橋』になつたかな。それより、廃止の記録はしっかり書いておけ。廃止ケースもたまに監査なんかで見られることもあるからな。その辺の事務処理の仕方は田所や戸沢に聞いてやっておけ。要否判定（保護が必要であるか、ないかの判定）では『保護否』になるよう、上手く書いておけよ」

「はい……」

「どうだ、これで少しはケースが信じられなくなっただろう？」

高橋係長が笑った。栄太郎は「修行します」と笑い返した。

そんな折、栄太郎の前の電話が鳴った。電話の主は矢口シズだった。先日、栄太郎に「プライドを傷付けられた」と怒りをぶつけた老婆だ。

「この前は怒っちゃって御免なさい。近いうち、ゆっくりとお茶でも飲みにきてよ」

栄太郎はフツと笑った。田所から矢口シズは長話になると聞かされていた。そんな老人の茶飲み話に、たまには付き合うのも悪くはないと思つた榮太郎だった。

六月十日の夕方、栄太郎は面接相談員の小島から声を掛けられた。小島は新規申請の受付を行い、生活保護の開始までを担っている。この小島から新規開始したケースを引き継ぐのだ。

「無料低額宿泊所の百日台寮から大量に保護の申請があつてさ。みんな、北島さんの地区なんだよ」

「無料低額宿泊所……ですか？」

「NPO法人が経営するホームレスのための施設だ。百日台寮は新



しくできたんだけどね。まあ、無料低額なんて謳いながら、住宅扶助の限度額、ぎりぎりまで取るだけどき。いわゆる貧困ビジネスだよ。とりあえず、五つばかり申請があって開始したから、北島さんに引き継ぐよ」

「えーっ、五つもですかあ……！」

この時期、年金改定があり、その資料集めに忙しい時期であった。年金の収入認定額を変更しなければならぬのだ。その時期に五人も新規ケースが増えるというのは、栄太郎にとって痛手であった。だが、無情にも栄太郎のデスクの上には五冊のケースファイルが積まれた。

「ふふふ、無料低額宿泊所の実態を知っておくのも勉強になるぞ。

それにしても百日台地区の保護率が上がるな。まあ、早いうちに訪問しとけよ」

高橋係長はペットボトルのお茶をグイと飲んで笑った。

栄太郎は何か釈然としないものを心の中に覚えながら、積み重ねたケースファイルを見つめた。

「みんな、百日台駅周辺でホームレスをしていたと言うが、あそこはホームレスの少ない地区だからな。本当かどうかは疑わしいぞ」

「そう言えば、百日台駅周辺でホームレスを見かけたことなんてないですよ」

「そうだろう。NPOなんて謳ってはいるが、しっかり保護費で稼いでいる施設だよ。入所したってケースは保護費のほとんどをNPOに搾取される。とても次のステップに進めたものじゃない。とにかく百日台寮は新規オープンしたばかりだからな。今はお客さん集めに必死なんだろう。都会ではNPOによるホームレス狩りなんていうのも行われている」

「ホームレス狩りですか？」

栄太郎は目を丸くした。高橋係長はパソコンから視線をずらし、栄太郎を見た。

「ホームレスを襲うことじゃないぞ。都会なんかにいるホームレス

に声を掛けて、集めて車に乗っけるんだ。そういう人集めをしているんだよ。そして、生保の申請の時にはその地区でホームレスをしていたと言わせる」

「そんなことがまかり通るんですか？」

「どこでホームレスをしていたかなんて証拠はどこにもない。NPOとケースの言うことを信じるしかないのが実情さ」

ホームレスの場合、発生地保護と言って、そのホームレスが窮状を訴えたところが保護の実施責任を負うことになっている。何か釈然としない思いを胸につかえたまま、栄太郎はケースファイルに目を落とした。

翌日、栄太郎は家庭訪問をしながら年金の改定通知を集めていた。十五時過ぎ、栄太郎の足はNPO法人が運営する無料低額宿泊所の百日台寮へ向いていた。百日台寮は潰れた社員寮を改修したもので、その外観は立派とは言えなかった。

「俺も元はホームレスだったんでさあ」

寮長と呼ばれる大柄の男は、どう見ても柄が悪そうだった。栄太郎は「まずは面接させてください」と言って、寮長の後に続いた。

横井啓太の部屋は一つの部屋を間仕切りで区切った、鰻の寝床のような部屋だった。

（これで住宅扶助の限度額ギリギリ取るのは、いくらなんでも酷すぎるな）

そんなことを思う栄太郎だった。

「横井さん、どうですか、ここの暮らしは？」

すると横井は万年床から起き上がることもせず、「最悪ですわ」と言った。

「何が最悪なんですか？」

「まず、受け取った保護費のほとんどを管理費として搾取される。自由に使える金はつきにして一、二万ですわ。それじゃあ、とても自立なんかできないでしょう。それに、寮の規則が厳しすぎる。酒

はダメ、門限はある、外出する時は寮長の許可を得る。これだったら貧乏暮らしをしていてもホームレスの方がマシですよ」

「ふーん……」

「あんたもホームレス狩りに遭ったのかい？」

「ああ、俺は元々、隣の二力瀬町の漁港で生活していたんだ。そこを、このNPOが搔っ攫いにきたってわけさ。生活保護を申請する時は、百日台駅にいたことにしろってNPOの幹部から言われたよ」

「それって、マズくないですか？ 虚偽申請ですよ」

この時、栄太郎は心の中に怒りの炎が広がっていくのを感じていた。その怒りは横井啓太に向けられたのではなく、あざといNPO法人に向けられていた。

横井啓太の部屋を出た栄太郎は寮長に詰め寄った。

「何で二力瀬町の漁港で生活していた横井さんが、帰帆市で保護しなきゃならないんですか？」

すると、寮長はしかめ面をしながら、「あの野郎、喋りやがったな」と言っつて、膝を叩いた。

「ホームレスの保護は発生地保護でしょう。だったら二力瀬町を管轄する笹熊福祉事務所に実施責任があるんじゃないんですか？」

栄太郎は更に寮長に詰め寄った。だが、寮長は動じない。

「あんた、生保の担当をやって何年になる？」

「この四月に異動してきたばかりです」

「ホームレスはな、最初に相談を受けた福祉事務所が責任を持つことになってるんだよ。これは県と福祉事務所の取り決めで決まっていることだ。確かに横井は二力瀬でホームレスをしていたかもしれない。だが、最初に相談したのは帰帆市の福祉事務所だ。何も文句はないだろう」

この時、栄太郎は何も言い返せない自分が悔しかった。まだ、制度をそこまで熟知していなかったのだ。だが、栄太郎の心の中には漠然とした怒りが、まだ燻っていた。

「でも、この鰻の寝床で住宅扶助ギリギリの金額を搾取するという

のはいかがなものでしょうかね？」

「ちゃんと県のガイドラインには従っているよ。間仕切りで個室を造れば住宅扶助の限度額まで徴収していいことになっている。そう、三万六千円をね……」

鰻の寝床、風呂・トイレ共同で、このご時世、家賃が三万六千円というのは高すぎる印象を受けても仕方ないだろう。栄太郎の感覚が世間の一般常識からずれているわけではなかった。

「じゃあ、管理費を徴収するのは？」

「そりゃ、こちらだって全部慈善事業ではやれないよ。食費や水光熱費だってかかるんだ」

「それでも支給した保護費のほとんどを徴収しているじゃないですか？」

「それが嫌なら出て行けばいい。まあ、元のホームレスに戻ることになるがね」

寮長は勝ち誇ったように言った。栄太郎はそれでも言い返せない自分が悔しかった。

その晩、栄太郎は市役所の近くの居酒屋で、高橋係長と酒を酌み交わしていた。

「まったく、どうしようもないですよ。あのNPOの無料低額宿泊所は……」

栄太郎がビールを煽りながら、愚痴った。

「まあ、そう怒るな。あんな施設でもない困るんだ。女性の場合、婦人相談所やシェルターがあるが、男性のホームレスの場合、無料低額宿泊所が出来るまで救う手段が実質なかったんだ」

「でも、あの環境が良いとは言えませんよ！」

栄太郎は声を荒げた。

「まあな。だが、会社の寮を追い出されて、ポストンバッグ一つをぶら下げて相談に来る奴らを救う手段が今までなかったんだ。それを思えばあんな施設でも『必要悪』だよ」

「そんなもんですかねえ……」

「あのNPO法人の元締を知っているか？」

「いえ……」

「古池不動産という悪徳不動産屋だ。まるでヤクザのような不動産屋だ。古いアパートや潰れた社員寮を次々に買い取り、無料低額宿泊所を県内に開設している。今度は貧困ビジネスに目を付けたつてわけだ」

「なるほど……。古池不動産なら知っていますよ。税務課にいた時にも、あそこは問題視されていましたからね」

栄太郎がビールをグイと煽る。高橋係長はホッピーだ。

「厚生労働省も無料低額宿泊所については目を瞑っているというか、むしろ頼りにしている状態だ。あれがないと、ホームレスの保護は出来ないからな」

「何で無料低額宿泊所がないとホームレスの保護は出来ないんですか？」

栄太郎が身を乗り出した。

「ホームレスのままの状態では保護出来ないんだよ。定住地がないまま保護を受けるということは、A市でも保護を受けられて、B市でも保護を受けようと思えば受けられることになる。だから、居住地を設定し、発生地保護の観点から実施責任を定め、事実上、居住地保護をするということになる。その場合、長年ホームレス生活が染み付いたケースをいきなりアパートなどで居住地を設定するのはリスクが高い。そこで無料低額宿泊所のような施設で見極めをしてからアパート設定をするのが建前だ。だから無料低額宿泊所は『必要悪』なんだよ。まあ、古池不動産みたいな無料低額宿泊所ばかりとは限らんが、それでも住宅扶助の上限ぎりぎりまで徴収したり、保護費をほとんど搾取したりするのは共通しているな」

高橋係長は一気にそう言うと、グーツとホッピーを飲み乾した。

「俺、次は日本酒でいくわ」

「あ、僕も付き合います。それにしても無料低額宿泊所は何故、純

粹な慈善事業でできないんですかね？」

「まあ、慈善事業だけでホームレスを救えるとは思わんがね。それにしてもしビジネスに走りすぎのきらいはあるよ」

「ふーん……」

栄太郎はつまらなさそうな顔をして、ビールを飲み乾した。

四日後の朝、栄太郎に百日台寮の寮長から電話が掛かってきた。

「横井啓太が三日前から行方不明になっているんだ。こちらは退寮の扱いをして、新規を入れるから……」

「何故、三日前からいなくなっているのに、今になって連絡をよこすんですか？ 遅すぎますよ」

「取り決めて三日は様子を見ることになっているんだ」

寮長は苛ついた声で、そう言った。栄太郎は悔しくて仕方なかった。横井啓太のケースファイルを取り出す。栄太郎は恨めしげにそれを眺めた。

栄太郎は思う。ホームレスの思惑と自分たちの支援との間にズレが生じていると。そして、そこに蔓延る貧困ビジネス。問題は糸口が見出せないまま混沌の色を湛えていた。

面接相談員の小島が怯えながら、栄太郎のところに来てきたのは七月二日、明日に保護の支給日を控えた日だった。

「ついに百日台で出ちゃいましたよ。マル暴の申請が……」

「マル暴って言うと、暴力団のことですか？」

「そう、元暴力団組員ということないないが、実態はどうだか？」

「マル暴の場合、三点セットを取るんですね。確か、脱退届と破門状、それと念書……」

「敵もさるもの、しっかり三点セットを提出してきやがった。まあ、大変だと思うけど、よろしく頼むよ。一応、警察に照会をかけておいた方がいいぞ」

小島はそう言うと、ケースファイルを栄太郎のデスクの上に置いた。そこには4756というケース番号と小山籐吉という名前が記されていた。

「マル暴上がりは指導困難ケースだな」

高橋係長がやるせないため息を交えて言った。

「初めてですよ。指導困難ケースは……」

「俺も小島から相談は受けていたが、なかなかの奴だぞ。覚悟しておいた方がいい」

「そんな悪い奴なんですか？」

「うむ。新規の開始記録を読めばわかるさ」

栄太郎はケース記録に目を落とした。

幼少の頃よりまともに学校に通っていなかった小山藤吉は、中学を卒業してすぐに黒寅組の舎弟になる。その後、若頭まで上り詰めるが、このところ、大した実績はないようだった。ただ、その前科はそうそうたるもので、傷害、恐喝、詐欺に覚醒剤と一通りの悪事はこなしているようだった。やっていないのは殺人くらいのものか。以前は隣の持立市で生活保護を受けていたようである。その際には、県警の家宅捜索が入り、覚醒剤所持で逮捕され、保護は廃止になっていた。逮捕拘留され刑務所に服役するとなると、拘置所の中で最低生活は保障されるため、保護は廃止となるのだ。

「灰皿の前へ行きませんか？」

栄太郎が高橋係長を誘った。煙草を吸わない栄太郎は自動販売機で缶コーヒーを買う。高橋係長が「ふふふ」と笑って席を立ち上がった。

市役所の裏側、灰皿の前で栄太郎は、缶コーヒーを片手に深刻な顔をしていた。高橋係長はフーツと煙を吐き出す。

「まず、訪問はもちろんのこと、面接は必ず二人で行った方がいいな。奴は詐欺の腕もかなりのものらしい。持立市では生業費を筆記取られたらしい。パソコンもメーカーにクレームを入れて騙し取っている。小島の言うように、警察に照会はかけた方がいいかもしれ

ないな。脱退届と破門状は偽物かもしれん……」

「はあーっ……」

栄太郎は重いため息をついた。

翌日は保護費の支給日だったのだが、窓口は物々しい雰囲気にもまれていた。ケースは順番に並んで、保護費の受け取りを待つ。だが、小山藤吉が周囲を恫喝し、一番にカウンターの前へ来たのだ。

「俺が小山だ。よろしく頼むぜ」

小山はわざと袖を捲くり上げ、刺青を見せている。周囲のケースは萎縮していた。

「小山さん、周囲を脅かさないでくださいよ」

栄太郎はため息をつくとき、小山にそう言った。

「おい、言葉に気をつけろよ。俺がいつ周囲を脅かしたって言うんだ。皆、優しいから俺に順番を譲ってくれたんじゃないか。なあ皆？」

小山藤吉が振り返る。だが、ケースの皆は萎縮したままだ。小山藤吉が受給者証と印鑑を無造作に差し出した。支給簿に印鑑を押し、もらつと、栄太郎は小山藤吉に保護費の入った封筒を渡す。小山藤吉はそれをその場で開封した。

「おい、少ねえじゃねえか。持立市はもつとくれたぞ」

「持立市とは級地が違つんです。出せるのはその金額です」

生活保護ではその級地によって金額が違う。窮地は1級地の1から3級地の2まで分かれている。帰帆市の場合は2級地の1であった。ちなみに持立市は1級地の2である。

小山藤吉は「けっ」と言うと、不満そうな顔をして、引き返していった。

その小山藤吉が最初にトラブルを引き起こしたのは、帰帆総合病院でのことだった。小山藤吉は「足が悪いから身体障害者手帳の診断書を書け」と医者に迫つたのだ。それは多分に詐病であった。だ



が医者は「そんなことで診断書は書けない」と突っぱねたのだ。病院のケースワーカーから電話を受けた栄太郎は、「大事にならなきゃいいが」と思っていた。

小山藤吉からは病院に行った翌日、電話が掛かってきた。

「帰帆総合病院の先生が身体障害者手帳の診断書を書いてくれねえんだよ。北島さんから医者によく言っておいてくれや」

「でも、どこも身体は悪くないじゃないですか」

「足が痛えんだよ。ここんところ、足が上がらねえんだ」

「そんなこと言ったら、誰でも障害者になってしまいますよ」

「うるせえ！俺の辛さがあんたにわかるって言うのか。俺の足は不自由なんだよ。何とか医者と交渉しろ！」

栄太郎は思った。小山藤吉は生活保護費が思ったよりも少なかったので、進退障害者手帳を取得することにより、障害者加算を狙っているのだと。身体障害者の1級と2級には障害者加算がつく。おそらく、小山藤吉はそれが欲しいのだ。

「医者が診断書を書けないと言っている以上、僕にも無理ですね。福祉事務所にそこまでの権限はないですから」

「けっ、頼りにならねえ奴だ。市長を出せ！」

この「市長を出せ」という台詞はクレームをつけてくる輩の常套句だ。

「このことは僕が担当になっているので、市長は関係ありません」

「ああ、だったら何とかしろよ。コラ！」

「何とも出来ないものは何とも出来ないとしか答えようがありませんね」

「上等じゃねえか。月夜ばかりじゃねえんだぞ！」

小山藤吉はそう言うと、乱暴に電話を切った。栄太郎の心臓はドキドキと早い鼓動を脈打っていた。

小山藤吉の住むアパートに栄太郎と高橋係長が家庭訪問したのは三日後だった。何でも、

「膝詰めで相談したいことがある」とのこと、訪問せざるを得なかったのだ。

小山藤吉のアパートは乱雑を極めていた。食い散らかしたカップ麺の空容器が転がっている。それに灰皿は山のように吸殻が積もっていた。

「ご相談したいことは？」

ランニングシャツに短パンの小山藤吉に栄太郎は話を切り出した。小山藤吉の腕には見事な刺青が彫られている。それは、栄太郎や高橋係長への「脅し」でもあった。

「今度、事業を始めようと思っっているんだ。そのために三百万ほどの金が必要」

「三百万……ですか？」

「そうだ。千社札を作る商売だ。人の自己顕示欲につけこんだ商売だ」

小山藤吉が手書きの拙い事業計画書をボンと栄太郎の前に放った。「出せねえとは言わせねえ。持立市はちゃんと生業費を出したんだからな」

「持立市での事業はどうなったんですか？」

「何、俺がシャブでパクられてお釈迦よ。だから、もう一度、やりてえんだ」

「それにしても三百万円というのは高すぎますね。基準額を大幅にオーバーしていますよ」

高橋係長が小山藤吉を睨むように言った。

「何、出せねえって言うのか。生活保護には特別基準というものがあるだろう。俺は知っているんだぞ。車の免許とか取る場合に費用を出せるじゃねえか。事業を始めるのに三百万なんて安いもんだよ」

栄太郎は小山藤吉に詐欺の前科があることを思い出していた。

「では、一応検討させていただきます」

高橋係長が事業計画書を受け取った。そして、変更申請書の様式を差し出した。

「これに『生業扶助、三百万円を支給してください』と書いていた  
だきましようか」

「おう、よろしく頼むぜ」

小山藤吉は上機嫌でペンを走らせた。それは小学生の低学年が書くような下手くそな字だった。栄太郎も高橋係長もやりきれない顔で、その変更申請書を眺めていた。

「本当に三百万も支給するんですか？」

小山藤吉のアパートを辞した栄太郎は、思わず高橋係長に尋ねた。「そんなわけないだろう。あの変更申請は却下だ、却下。特別基準の上限額を遥かに超えているからな」

「じゃあ何故、わざわざ変更申請書まで書かせたりしたんですか？」  
「生業費を請求する権利はある。だから変更申請書を書かせたまでだ。ふふふ、検討すると言っただけで、支給するとは言っていない。だが、却下されたと知ったら小山藤吉は怒るだろうな。脅迫に出るかもしれない」

「ゾツとしますよ。何しろ熊のようなあのガタイですからね」

「ここで折れたら、俺たちの負けだ。行政に脅しは通用しないことをわからせてやろうじゃないか」

高橋係長は不適な笑みを浮かべて、公用車の助手席に乗った。

翌日、栄太郎のデスクに外線が入った。栄太郎は小山藤吉でないことを祈った。だが、その電話は県警の暴力団対策室からだった。

「先日、ご照会いただいた小山藤吉の件ですけど、まだ黒寅組に所属していますね。れっきとした暴力団幹部ですよ」

「ええっ、そうなんですか？ でも脱退届と破門状は提出されていませんよ」

「おそらく破門状は偽物でしょう。脱退届は組長が受理しない限り無効です。小山藤吉はまだ幹部として堂々と名を連ねていますよ。まあ、今は相談役くらいの活動でしょうけどね」

電話を切った栄太郎は高橋係長に県警からの電話の内容を報告し

た。

「保護廃止だな、廃止……」

「本人が納得しますかね？」

「そんなこと関係ない。生活保護手帳に載っている、『生活保護を適正に運営するための手引き』を見てみる」

栄太郎は早速、生活保護手帳を捲る。すると、そこには「暴力団員に対する生活保護の適用の考え方」という文書が載っており、「保護の要件を満たさないものとして、急迫状況にある場合を除き、申請を却下することとする。また、保護受給中に、被保護者が暴力団員であることが判明した場合にも、同様の考えに基づき保護の廃止を検討する」と書いてあった。

「ふーん……。で、これで納得するでしょうかね、小山藤吉は……」  
「納得なんかするはずなかるう。でも俺たちは小山藤吉の生活保護を廃止しなければならぬんだ」

そう言った高橋係長の瞳には力が籠っていた。栄太郎は不安げな顔を返すことしか出来なかった。

「何で、生保が廃止になるんだよー！」

小山藤吉は面接室で大声を上げた。栄太郎はやや肩をすくめているが、高橋係長は動じない。

「小山さんはまだ、黒寅組の幹部でいらっしやいますね」

高橋係長は小山藤吉の瞳を見据えて言った。

「ちっ、警察に照会しやがったな。そうよ、そうともよ。俺はまだ黒寅組を抜けちゃいねえ。だが、暴力団の組員が生保を受けちゃいけねえって誰が決めたんだ。組員だって人だぞ。人権はあるんだぞ！」

「厚生労働省の通知で決まっています。暴力団員には保護が適用できないって……」

栄太郎が少しおっかなびっくりに言った。

「面白え、喧嘩を売ろうっていいのかい。この黒寅組に……」

「そんな気は毛頭ありませんよ」

「なら、納得のいく説明をしてもらおうじゃねえか」

「暴力団員の場合には非合法な形で収入を得ていますね。それは表面化されることはない。つまり、我々もどのように収入認定していいかわからないんです。そして、収入を申告してもらっても、それを裏付けるものは何もない。第一、あなたの場合は稼働年齢層なんだから、稼働能力非活用でも保護の対象にはなりません」

栄太郎は一気に捲し立てた。高橋係長は「暴力団にも金が回っているんじゃないんですか？ それは不正受給ですよ」と言い添えた。「面白え、実に面白えよ。そんなに黒寅組に喧嘩を売ってえか。いか、覚えてろよ。月夜ばかりじゃねえんだぞ。そのうちあんたら、怪我するくらいじゃ済まなくなるぜ」

小山藤吉が冷却器を忍ばせた声で脅す。

「それは福祉事務所に対する脅迫ですか？ ならば、我々は警察に相談して中止命令を検討せざるを得ませんな」

高橋係長が小山藤吉を睨みつけながら言った。

「ぐっ、中止命令か……。あれを出されるとこっちは手も足も出ん。卑怯だな、福祉事務所は……」

小山藤吉は悔しそうな顔をする。

「おわかりいただけたら、お引取り願いまししょうか」

高橋係長が立ち上がり、面接室の扉を開けた。小山藤吉は「覚えてろよ」という捨て台詞を吐いて、帰っていった。

それから二日後のことである。帰帆警察署の瀬田という刑事から栄太郎に電話が入ったのは。

「小山藤吉が受け取った保護費の額を知りたいんです」

「何故ですか……？」

栄太郎はいささか呆けた顔でもしていただろうか。

「はい。ガサ入れ（家宅捜索）を行ったんですわ。暴力団の資金源を今、洗い出しているところなんです」

「そうですね。今、丁度、彼の生活保護の廃止の手続きをしているところなんですよ」

「生活保護、廃止になるんですか？」

「ええ、暴力団の幹部だということが、県警に照会してわかりましたからね」

「ほう、そこまで調べたんですか」

「小山藤吉に支給した金額はお調べして、折り返しお電話いたします」

「よろしくお願い致します」

電話を切った栄太郎は、小山藤吉のケースファイルに目を落としました。

(早く、廃止の記録を書いてしまおう)  
そう思っている栄太郎であった。

その翌日、栄太郎は高橋係長と小山藤吉のアパートに家庭訪問に出掛けた。保護の廃止決定通知を持っていったのである。栄太郎は「何故、郵送じゃダメなんですか？」と高橋係長に尋ねた。その答えは「審査請求(不服申し立て)について説明する義務があるからだ」とのことだった。

栄太郎は気を引き締めて、呼び鈴を鳴らした。だが、返事はない。「北島、電気メーターだ」

高橋係長が栄太郎に指示する。栄太郎は電気メーターを見た。それは勢い良く回っていた。耳を澄ますと、部屋の中からテレビと思しき音が聞こえる。

「居留守かよ……」

栄太郎と高橋係長はアパートの裏手に回った。カーテンは開かれていた。

そこで栄太郎の目に飛び込んできたのは、涎を垂らしながら倒れている小山藤吉の姿だった。

窓には鍵がかかっていなかった。栄太郎は咄嗟に部屋の中に飛び

込んだ。

「小山さん！」

声を掛けるが返答はない。小山藤吉は口から泡を吹いている。

「北島、救急車だ！ それから警察にも連絡しろ！」

「はい！」

栄太郎は携帯電話を弄った。その時、畳の上に落ちている注射器を見つけた。

（シャブか……！）

小山藤吉は帰帆市の郊外にある新生会病院に入院することになった。やはり、覚醒剤による副作用とのことで、意識はまだ戻っていなかった。警察は意識を取り戻し次第、逮捕すると息巻いていたが、チューブに繋がれた小山藤吉の姿に、暴力団の幹部としての風格はなかった。そこにいるのは初老の病人のように栄太郎には見えなかった。

小山藤吉に見舞いをする者は暴力団関係者を含めて皆無だった。

栄太郎は思う。これまで小山藤吉はどれだけの人に迷惑を掛けてきたのだろうか。そして、また自分も迷惑を掛けられていると思うのであった。それは援助者として抱いてはいけない感情なのかもしれない。だが、その前に栄太郎も人である。

一度は生活保護の廃止決定をした小山等吉だが、医療費の支払いが困難なため、医療費を生活保護で出さざるを得なくなった。いわゆる急迫保護である。生活保護では国民健康保険の加入が認められていない。生活保護が全額、医療費を負担するのだ。

（何でこんな奴に国民や市民の税金を使わなければならないのだ……）

そんな思いが栄太郎の頭の中を過ぎった。小山藤吉に脅されたことを思い出すと、チューブを引き抜いてしまいたい衝動に駆られる栄太郎であった。だが、そんなことが出来るはずもなかった。

「ありゃ、もうダメだね」

栄太郎が病院を出る時に病院のケースワーカーの田辺が言った。

「ダメってことは、もう死ぬっていうことですか？」

「まあ、私は医者じゃないから何とも言えんが、その可能性もあるねえ。まあ、意識が戻ってもレロレロだろうね。しかし、おたくも因果な商売だね。あんな奴の最後を押し付けられてさ……」

「さつき、チューブを引き抜きたくなりましたよ」

「わかりますよ。その気持ち……。まあ、ロクな死には出来ないね。あいつの場合……」

田辺は吐き棄てるように言った。

「しかし警察も間抜けだよなあ。ガサ入れまでして、逮捕できなかったんだから。その時に逮捕していれば、うちにもあなたにも迷惑が掛かることはなかった……」

田辺は皮肉たっぷりに言った。

栄太郎は田辺に一礼をして病院を辞した。だが、田辺はいつまでも栄太郎の背中を見つめていた。



## 生と死

横井啓太が笹熊大橋で死亡しているのが確認されたのは七月二十四日の未明のことだった。横井啓太といえば、無料低額宿泊所から姿をくらましたホームレスである。当然のことながら、生活保護はとつくに廃止となっていた。

その横井啓太が帰帆市と二力瀬町の境である、笹熊川に架かる笹熊大橋で行き倒れているところを発見されたのだ。通報者は早朝ラッシングをしていた地元の主婦で、救急車を要請したが、その時、既に死亡が確認されていた。そこで帰帆警察署に遺体は搬送されたのである。

「頭はどつちを向いていた？」

高橋係長はそのことが気に掛かるようだった。

「どうやら、こつち（帰帆市）を向いていたようです」

栄太郎は高橋係長を見て言った。

「じゃあ、面倒臭いけど、うちでやるより他はないな」

「頭の向きが関係あるんですか？」

「ああ、市町村の境に架かる橋で行旅病人や死亡人が出た場合は、頭を向けている市町村が管轄をするんだ。生保も同じだよ。つまり、そつちに行こうとしていた意思があったということだな」

「でも、後ろ向きに倒れていたら逆じゃないですか？」

「そんなことまでは知らん。兎に角、そういう取り決めになっているんだよ」

高橋係長は面倒臭そうに、そう言った。

「問題はこれからなんだ。民生委員が葬祭の執行者になってくれれば生活保護法第18条2項2号（葬祭扶助）でも処理できるし、逆に葬祭の執行者がいないとなると埋葬法（墓地、埋葬に関する法律）や行旅法（行旅病人及行旅死亡人取扱法）での処理も可能だ。まあ、どれもうちの市ではこの生活福祉課の業務だがね。こういう場合は

いつもどれでやるかで揉めるんだ。まあ、生保でやるならば、民生委員に葬祭の執行者になってもらうんだな。墓埋法と行旅法の担当は戸沢だ。よく検討、相談して決めてくれ」

「今回は葬祭扶助を適用できませんか？」

「ん、何故だ？」

「生保で関わった方ですから、僕が最後まで責任を持ちたいんです」  
「わかった。ケースワーカーにはその思いが大切だ。いいか、小さくまとまるなよ。自分の信じた道を行け」

「はい……。で、今回の葬儀屋も辰巳屋です。警察から連絡がありました」

「しかし、警察もよく身元がわかったな」

「遺品に受給者証があったそうです。警察はそれでまだ生保のお客さんだと思っただらしく……」

栄太郎には横井啓太に対する思いがあった。確かに生活保護として関わった日数は少ない。ただ、NPOにホームレス狩りで無料低額宿泊所に押し込められ、自由を奪われていた彼に同情していたのだ。横井啓太は栄太郎には本音を言い、二力瀬町でホームレスをしていたという事実を告げてくれた。そんな彼の最後を看取ってやりたかった。

栄太郎は受話器を上げると、早速、辰巳屋へ電話を入れた。

「済みません。今回の横井さんは福祉扱いでお願い致します」

その横で、高橋係長はニヤニヤ笑っていた。

横井啓太の葬儀にはやはり葬儀屋の辰巳屋の他には栄太郎しか立ち会わなかった。花など付かない、火葬するだけのシンプルな葬儀である。

栄太郎は棺の中の横井啓太の顔を覗き込んだ。それは安らかな死に顔ではなかった。目こそ閉じられていたが、苦しみがいたのだろう、口は開いたままだった。

辰巳屋が栄太郎に死亡診断書を見せてくれた。そこには「栄養失

調症」と記載されていた。つまりは餓死である。これほど豊になった現代社会でも、まだ餓死が存在することをその死亡診断書は示していた。それは少なからず、栄太郎に衝撃を与えたのである。

横井啓太はあの無料低額宿泊所に入所していれば、餓死は免れたかもしれない。しかし、横井啓太は自由と人間の尊厳を貫いて、あの無料低額宿泊所から行方をくらましたのだ。おそらくは、二力瀬町の漁港に戻ったであろうことは、容易に推測できた。何故、帰帆市に向かっていたのかは不明だ。もしかしたら、また生活保護の相談をしに来たのかもしれない。だが、遺体は何も喋らなかつた。

「それでは出棺です」

重々しい音を立てて、斎場の釜が開いた。いよいよ火葬である。

栄太郎は釜に入れられていく棺に向かって手を合わせると、黙禱を捧げた。

横井啓太が茶毘に付されている間、栄太郎は辰巳屋と世間話をしていた。

「辰巳屋さんは金にならない葬儀ばかり引き受けているんじゃないですか？」

「大きな声では言えませんがね。親族で葬儀を出す場合は、それなりに頂いているんですよ」

「福祉で葬儀をする場合と、親族が葬儀をする場合では、そんなに値段が違うもんですか？」

「三倍から五倍は違いますよ」

「すると、大雑把に見積もっても百万以上はかかると……」

「そう思っただけで結構です」

栄太郎は葬祭ビジネスの裏側を少し垣間見たような気がした。

「でも、前みたいなの、あの高山真治さんみたいな、あんなご遺体も結構あるものなんですか？」

「孤独死でもすべてが福祉の世話になるわけじゃありませんからね。親族が葬儀を引き受けてくれれば、親族でお願いするケースも多いですよ。警察も結構、親族にはごり押ししますからね」

栄太郎は思った。横井啓太や高山真治のような孤独死は氷山の一角なのだ。兎角、殺伐としがちな生活保護の業務で、死に対する感覚が麻痺しているようにも思えてくる栄太郎であった。

(だが、今は感傷に浸ろう……)

栄太郎は無料低額宿泊所で寂しげな微笑を浮かべていた横井啓太の顔を思い浮かべていた。

やがて火葬が終わり、横井啓太の遺骨が釜から引き出された。その遺骨は薄茶色をしており、随分と華奢な骨だった。栄太郎は辰巳屋と頭蓋骨の骨を箸で摘んだ。残りの骨は係員が集めて骨壺におさめていった。埋葬許可証をその上に添える。栄太郎はその骨壺を大事そうに抱きかかえた。

成願寺の無縁仏に横井啓太の遺骨を納骨に行つたのは、その日の午後であった。成願寺の住職は「またか？」と露骨に嫌そうな顔をした。

「新入りですが、よろしくお願い致します」

栄太郎はそう言つて、住職に遺骨を引き渡した。住職は穢れた物でも持つように、遺骨を受け取つた。

(感傷に浸るのはここで終わりだ……)

栄太郎は自分にそう言い聞かせていた。栄太郎には百人ほどの生きたケースがいる。その人たちの支援に頭を切り替えなければならなかった。

九月六日、その電話は突然掛かってきた。それは帰帆総合病院のケースワーカー、迫からの電話だった。

「高津栄子さんが本日、入院したんですが、医療費の支払いが困難なので、生活保護を申請したいのですが……、以前の経過から保護は無理だと本人はおっしゃるんです。でも、医療費の支払い能力はないんです。病院としても医療費の焦げ付きは困るので、生活保護に出来なですかねえ？」

「まあ、迫さんだから話しますけどね。高津栄子は以前に不正受給

をしていたんですよ。黙ってスナックで働いていたんです。不正受給を見逃す代わりに、保護を辞退してもらった経過がありますので、そうおいそれとは保護をかけられませんよ」

「でも、事態は急迫しているんです」

「少し、所内で検討させてもらえませんか？」

「明日にはお返事を戴けますか？」

「わかりました」

栄太郎は頭を抱えて電話を切った。

程なくして、市役所裏口の灰皿の前に栄太郎と高橋係長の姿を見ることが出来る。栄太郎からの報告を受けた高橋係長は、煙草の煙の行方を目で追いながら、「うーむ」と唸った。

「で、北島としては、どうしたいんだ？」

「確かに保護をかけるのは悔しいですけど、病院との関係を悪化させたくないこともあるんですよ」

「それだけか？」

「は？」

「本当は高津栄子に同情しているんじゃないのか？」

「ああ、まあ、はい……」

高橋係長の言ったことは凶星だった。栄太郎の中には高津栄子の保護廃止に対して、どこか胸につかえるものがあつたのだ。それは不正受給までして、昔、棄てた息子に仕送りをしていた母の愛情にほだされたのかもしれない。栄太郎の心の片隅には、いつも高津栄子がいたのだ。

「まあ、仕方ないだろうな。口惜しいのは事実だが、今回はナナハチを大目に見ても同情する余地はある。北島の好きにやれよ。地区担当員は想いが大切だ」

「ありがとうございます」

栄太郎は晴れやかな顔をして、高橋係長に頭を下げた。高橋係長は「もう不正受給はしないという、念書を取っておけよ」と言い添えた。

翌日、栄太郎は帰帆総合病院を訪れていた。ケースワーカーの迫にまず挨拶をし、高津栄子の病室へと向かった。

「すみません。本当はお願い出来る立場じゃないのに……」

高津栄子はしおらしくそう言った。栄太郎は「いいんですよ」と言って、生活保護の申請書を差し出した。

「もう私、長いことないらしいんです……」

「え？」

「あれから二カ瀬駅前肉屋で働き、夜はスナック。これでも頑張ったんですよ。でも急に不正出血して……。検査の結果、肺にも子宮にも癌が転移していて、手遅れだって先生が言っていました。入院も長引くことはないって……」

「後は在宅で通院ですか？」

「いいいよになったらホスピスを紹介するって先生が言っていましたわ」

「そうですね……。でも、頑張って病氣と闘いましょうよ。息子さんに一目、会いたくないですか？」

すると、高津栄子は「ふう」とため息をつきながら、窓の外の景色を眺めた。

「そりゃ、息子にだって会いたいわよ。でもね、棄てた息子だからね。会ってくれるかどうか……」

「息子さんには僕から連絡を入れてみますよ。確か三徳園という児童養護施設に入所していましたよね。僕も僕なりに考えてみたんです。息子さんを施設に預けるには断腸の思いだったでしょうね」

「うつつ……」

高津栄子が嗚咽を漏らした。

「息子は私を恨んでいるでしょうね。でも、一人じゃ育てられなかった。育てられなかったのよ……」

栄太郎は立ち尽くして、高津栄子の泣く様を見ていた。高津栄子の息子、貴は非嫡出子だった。おそらく、高津栄子には言えな

いような苦勞をその背中に背負っていきってきたに違いなかった。少なくとも栄太郎にはそう思えた。

高津栄子はひとしきり泣くと、「あんのことになったのに、本当に御免なさい」と言つて、保護の申請用紙にペンを走らせた。

申請用紙を受け取つた栄太郎は高津栄子の主治医の元へ足を運んだ。病状を聴取するためだ。

「そうだねえ、持って二、三ヶ月というところかねえ……」

主治医の井田医師はカルテを見ながら、そう高津栄子の余命を語つた。

「二、三ヶ月ですか……」

「肺と子宮に癌が転移していて、手の施しようがないんだよ。抗癌剤や放射線治療も本人が拒否しているし、まあ、一週間くらい経過を見て、後は在宅ね。そして、痛みが酷くなったらホスピスというのが妥当じゃないかなあ」

「そうですか……」

「会わせたい親族とかがいたら、早めの方がいいと思うよ」

「わかりました。お忙しいところ、ありがとうございました」

栄太郎は井田医師に深々と頭を下げると、診察室を辞した。

その翌日、栄太郎は児童養護施設「三徳園」に来ていた。高津栄子の息子、高津貴に会うためである。

高津貴はつまらなさそうな顔をして、園長室までやってきた。今は高校一年生になる高津貴であった。髪を茶色に染めた高津貴は今の時の高校生といった風体をしている。

「お袋に何かあつたんすか？」

高津貴は栄太郎に頭を下げることもなく、突っ立ったままそう言つた。

「君のお母さんだけだね。末期の癌なんだ。もう、長いことはないと思う。もし貴君にその気があるならば、会ってやってくれないか？」

栄太郎は高津貴の瞳を見ながら言った。だが、高津貴は栄太郎と目を合わせようとはしない。

「俺には関係ないっスよ。俺を棄てたお袋ですよ。今更、会ったって何の意味があるんスか？」

「そうは言っても、君のために仕送りをしてきていたじゃないですか」

「そっなんスか？ 初耳です」

栄太郎も高津貴も「あれっ？」というような顔をした。園長が「ゴホン」と咳払いをする。

「ああ、君のお母さんからの仕送りね、あれは園で預かって管理しているから……」

園長が取り繕うように言った。

「何で今まで黙っていたんスか？」

「いや、君が将来自立するための資金として園で保管しているんだよ。今、君に話すと浪費してしまうだろう」

園長は苦し紛れの弁解をする。

「出納簿はあるんですか？」

栄太郎が園長を見据えて尋ねた。

「そんなもん、ないよ。送られてきた金は全部金庫に保管してある」「やっぱり大人は信用ならねえな……」

高津貴がボソツと呟いた。その瞳は憎悪に燃えていた。

「俺の記憶の中では、お袋は優しかった。でも、俺を棄てたんだ。この施設にね。今まで幸せだった俺の生活は一変した。今までお袋が作ってくれた温かい飯から、冷めたゴムみたいな飯になるし、職員は俺の親になるつもりなんてない。時間が来たら『はい、さようなら』で交替だ。だから、大人なんか信用しない。俺はね、自分が怖いんスよ。これで、まともな大人になれるかなって……」

高津貴は恨みの籠った声色で、そう語った。

「君のお母さんはね、好きで君を手放したわけじゃないんだ。女手一つで君を育てられないと思い、苦しい選択の末、君をここへ入所



させたんだ。だから罪滅ぼしの意味も含めて、君への仕送りは欠かさなかった。兎も角、一度会ってやってくれないかなあ、お母さんに……」

高津貴はボリボリと頭を掻いた。その表情は困惑している。

「まあ、考えておきます」

高津貴はそう言うと、踵を返し、園長室から出ていった。栄太郎は立ち上がると、その背中に「後悔はするなよ」と声を掛けた。だが、高津貴が振り返ることはなかった。

市役所に戻ると「待っていました」とばかりに、新生会病院の田辺から栄太郎に電話が入った。

「小山藤吉、意識が戻りましたよ。でも、脳の損傷が著しいのか、まともに会話もできませんよ。涎も流し放しです」

「そうですか……」

「うちもあんな患者をいつまでも看ているわけにはいかないので、愛向会病院という精神病院に転院させます。ここだけの話なんですがね。あそこは環境こそ良いとは言えませんが、いわゆる『お助け病院』なんですよ。まあ、あそこでレロレロのまま一生を過ごすのも仕方ないんじゃないですか。それなりに周囲に迷惑を掛けてきたんだし……」

「そうですか。手配、ありがとうございました」

「それにしても一ヶ月の医療費だけで軽く百万を越えましたよ。あんなのに税金を使うのは勿体無い気がしますけどねえ……」

「僕の口からは、何とも言えないですね」

「まあ、そのうち愛向会病院に向いて、状況を見てきてください。小山の最後に相応しい場所と言えば、言えるかもしれせんよ。ふふ……」

田辺は意味深に笑った。栄太郎は電話口で思わず苦笑を漏らした。愛向会病院ならば栄太郎の担当するケースも入院している。統合失調症の男性患者だった。いつもあらぬ妄想に支配されていて、とて

も在宅生活が営めるようなケースではなかった。そのケースの入院歴は二十年にも亘っていた。

木島愛子の妊娠が発覚したのは十月の支給日の時だった。

木島愛子は母子世帯の母親で、二人の息子がいる。一人は小学校一年生で、もう一人は未就学だ。二人の父親はそれぞれ違い、認知もされていなかった。

保護費を受け取りに来る際、異様に腹部が出ていた。

「木島さん、妊娠していますね？」

栄太郎はズバリと尋ねた。すると、木島愛子は「ああ、やっぱりバレちゃいましたか」と言いながら、舌をペロリと出した。

「相手は誰なんですか？」

栄太郎はカウンターから身を乗り出して尋ねた。

「携帯電話の出会い系サイトで知り合った男ですよ。やり逃げされちゃった」

木島愛子は悪びれる様子もなく、そう言って退けた。

「じゃあ、また認知してもらえないじゃないですか？」

「まあ、そういうことになりますね」

「今、何ヶ月なんですか？」

「五ヶ月目に入ったところかな……」

「それじゃ、もう墮せないじゃないですか。墮すのが良いとはいいいませんがね、無責任ですよ。あまりにも……！」

「だってえ、今まで誰にも相談できなかつたんだもん……」

木島愛子は拗ねたように言った。栄太郎は後ろの事務椅子に「はあーっ」と深いため息をついて、ドサリと座った。

木島愛子はネグレクトの児童虐待で児童相談所にも通報があったケースだ。おそらく、産まれてくる子どもの養育もまともに来るはしないだろうと、栄太郎は推測する。

「そのツケは全部、生保かよ。税金かよ……」

栄太郎は恨みの籠った声で呟いた。

その翌日、早速、木島愛子の家庭訪問をした栄太郎だった。気は進まなかった。母子家庭の家庭訪問はどうも足が遠のいてしまう栄太郎であり、そのことを高橋係長にも指摘されていた。だが、今回はそれも言っていられない状況だ。木島愛子の家の中は乱雑をきわめていた。

「墮す費用も工面できなくて、ズルズルここまで来てしまいました」  
木島愛子は言い訳がましく、そう言った。

「こういうことは、すぐに相談してくれないとね。小さなお子さん抱えて、どうやって産む気ですか？ 頼れるところはあるんですか？」

「それが実家とは犬猿の仲ですし、頼れるところもなくて……」  
「じゃあ、どうするつもりなんですか？ まともに検診も行っていないでしょう？」

「ええ、産婦人科には行っていません。母子手帳もまだ貰っていないし……」

「まったく、無責任にも程がありますな」

栄太郎は腕組みをして、頭を垂れる木島愛子を見下ろした。それでも、検診も受けず、墮胎可能な期間を過ぎた木島愛子を何とかしないわけにはいかなかった。木島愛子の次男が、無邪気にも彼女の周りに纏わり付いていた。栄太郎はこの次男が小学校に入学したら、木島愛子に就労指導をしようと思っていたのである。保育所は木島愛子を嫌い、入所を断られていたのだ。何せ、ネグレクトで児童相談所に通報されるくらいである。木島愛子に子どもたちのまともな養育が出来るとは、栄太郎にはとても思えなかった。そして、高津貴のような思いだけは、子どもたちにさせまいとも思うのだった。

「寂しかった。寂しかったんですよ。誰にも相手にされない自分が……。だから出会い系サイトで……」

「少しは自分の立場をわきまえてください。親が遊び呆けて、悲しい思いをするのは子どもなんですよ」

「はい……」

木島愛子は項垂れた頭を上げることなく、小さく呟いた。

「まあ、こうなったからには仕方がない。検診命令つていうのを出しますから、助産施設でもある帰帆総合病院で検診を受けてください」

「わかりました」

栄太郎が検診命令書を差し出す。木島愛子はそれを恭しく受け取った。

十月十三日。栄太郎は高津栄子のアパートに家庭訪問しようと思っていた。もう、退院をし、在宅生活を送っている高津栄子である。本来は前日に家庭訪問をしようと思っていた栄太郎だが、「通院があるから」と今日になったのである。

アパートの呼び鈴を鳴らすが、返事はない。電気メーターはグルグル回っている。

「参ったなあ。居留守を使うわけないんだけどなあ」

栄太郎はドアノブを捻った。鍵はかかっていなかった。

「高津さん……」

すると、台所で高津栄子が倒れていた。

「高津さん！」

栄太郎は高津栄子の下に駆け寄った。その身体に触れてみる。だが、もう温もりはなかった。高津栄子は死亡していたのである。

「大変です。高津栄子が死んでいるんです。第一発見者になってしまいました」

栄太郎は高橋係長に携帯電話で、そう連絡を取った。高橋係長は「駐在を呼べ」と指示し、「昨日、病院に行っているなら大丈夫だ」と言った。

栄太郎の連絡を受けて駐在はすぐに来た。高山真治の時にもお世話になった駐在だ。

「こういう場合はまず救急車を要請してもらわないと困りますな」

駐在は動かぬ高津栄子を見て言った。程なくして、帰帆警察署より生活安全課の掲示と鑑識が到着した。

生活安全課長だという若い刑事は、自分より遙かに歳のいった刑事を顎でこき使っていた。栄太郎は生活安全課長なる男が、キャリア組であるのだろうと推測した。

「あんたが第一発見者？」

生活安全課長は手帳にペンを携え、栄太郎の前にやってきた。

「はい」

「高津さんは病気か何かあったのかね？」

「大腸癌が肺と子宮に転移して末期症状でした。昨日も帰帆総合病院に受診しているはずです」

生活安全課長はメモを取ると、「おい手島、帰帆総合病院の受診歴を調べろ！」と怒鳴った。指示された手島という刑事は、生活安全課長より遙かに歳は上である。既に頭も少し禿げ上がっている。

手島刑事は「はい」と言うと、携帯電話を弄った。その生活安全課長の横柄な態度を見て、栄太郎は気分が悪くなった。

「昨日の十六時に帰帆総合病院に受診しています」

しばらくして手島刑事が生活安全課長に報告した。

「まあ、二十四時間以内に受診しているならば、問題はないだろう。しかしね、こういう場合はまず救急を要請すべきなんだよ」

「確実に死んでいてもですか？」

「死亡は素人が判断することではないんだ」

生活安全課長はピシヤリと言った。それは口答えを許さない威圧感があった。

高津栄子はまた辰巳屋に遺体が引き渡された。栄太郎は辰巳屋と連絡を取り、葬儀について福祉でやることを告げた。

そして栄太郎は三徳園にも連絡を入れなければならなかった。そう、高津栄子の息子、高津貴にである。三徳園の三田という職員は葬儀の予定を聞くと「必ず、貴君を行かせますから」と言ってくれ

た。

三徳園の三田と火葬場に現れた高津貴は、髪を黒く染め戻していた。

「こんな形になっちゃったけど、お母さんと最後のご対面だよ」

栄太郎に促され、高津貴は棺を覗き込んだ。

「うつつ、お母さん……」

高津貴の目から大粒の涙がこぼれた。自分を棄て、どんなに憎い感情を抱いていたとしても、そこはやはり肉親の死だ。高津貴の胸中に悲しみが訪れないわけがないと思う栄太郎だった。親子の憎愛劇は死をもつて終止符が打たれたのである。

「貴君が自立していれば、貴君に葬儀を執行してもらうところだけど、今回は福祉事務所の方でやらせてもらうよ。シンプルな葬儀だけだね。遺骨は一旦、成願寺の無縁仏に預けるから、貴君が働いてお墓を造れるようになったら、是非お墓を造って、遺骨を移してあげるといい」

栄太郎がそう言うと、高津貴は「はい。必ず働いてお墓を造ります」と涙を拭きながら言った。

「それでは出棺のお時間です」

火葬場の釜が開く。

「お母さん……！」

高津貴が大声を張り上げて泣いた。栄太郎は生きているうちに親子の対面が出来なかったことを悔やんでいた。

その翌日、高津栄子のアパートの片づけを行うことになっていた。栄太郎はそこに高津貴も立ち会わせる約束を取り付けた。三徳園の職員も非番なのに付き合ってくれた。

高津栄子の部屋は女所帯にしては珍しく散らかっていた。それは高津栄子が晩年、身体が言うことを利かなかったことを意味していた。

「結構散らかっているな……」

片付けの応援に来ていた田所と戸沢が口を揃えて言った。

「これが、お母さんの家……」

高津貴は呆然としている。

「そうだ、おそらく身体の自由が利かなくなっていたんだろう。散らかっているのはそのせいだよ」

高津貴はふと、筆筒の上に飾ってある写真を見つけた。そこには幼い日の高津貴が写っている。

「お母さん……、僕の写真を……」

それを手にした高津貴はそつと涙を滲ませた。

「そうだ。生活保護の不正受給をしてまで君に仕送りをしてきたんだ。君にとっては立派な母親じゃないか」

栄太郎は高津貴の肩に手を置いた。その肩が震えていた。

「お母さん……」

「大体の物は片付けるけど、どうしても持って帰りたい物があつたら持っていきなさい」

高津貴は部屋を見回す。その手には高津栄子が大事にしていた自分の写真が握られていた。

「母が……、一番大切にしていたものは何ですか？」

高津貴が震える声で尋ねた。

「それは君だよ」

答えたのは田所であった。

「正直、我々はスナックで隠れて働いていたお母さんを憎む感情を持っていた。生活保護の不正受給だからね。だが、そんな違法行為までして、君のお母さんは君に仕送りをしていた。それは一番に君の幸せを願っていたからじゃないかな」

「うつつ、お母さん……、お母さんにはもっと愛されたかった！

お母さんにはもっと甘えたかった！」

高津貴がその場に泣き崩れた。本当はさつさと家の片づけをしたかと思っている田所と戸沢であったが、高津貴を黙って見下ろしていた。栄太郎がむせび泣く高津貴の背中をそつと撫でてやる。その

仕草が優しかった。

田所と戸沢は箆笥の引き出しを開けた。

「こんな物が入っていましたよ」

戸沢が差し出したのは、臍の緒だった。高津貴の臍の緒である。

「君のお母さんは死ぬまで君のことを心配していたんだろうな。まあ、自分の腹を痛めた子だ。その親子の繋がりには君が考えている以上に深いと思うよ」

戸沢が臍の緒を高津貴に渡す。高津貴は恭しくそれを受け取った。

「あーあ、下着が散らかってらあ……」

田所が何枚かの下着を手で掬った。それはパンツだったのだが、子宮癌による不正出血が続いていたのだろう。パンツは血と澱物で汚れていた。

「お母さんの血……」

高津貴がそのパンツを見つめた。

「まだ生きていた頃の証だよ……」

栄太郎が唸るように言った。

「それ、僕に下さい……」

「どうぞ。ビニールに入れようか？」

「いえ、そのままでもいいです。汚い物とは思えませんが……」

高津貴は田所から汚れたパンツを受け取った。

それは年の瀬にも近い十二月十五日から三日間にかけて行われた。生活保護法施行事務監査である。それは県本庁の生活援護課から監査職員が派遣され、事務運営面、ケース検討を行われるのである。監査職員は書面検討を行った上で、査察指導員や地区担当員からヒアリングを行うのだ。栄太郎にとっては初めての経験であったが、そのための資料作りに、連日大残業を行って挑む監査であった。

それは監査二日目に発覚した。一時扶助の移送費の支給明細に受領印がないものが発見されたのだ。それは田所が担当するケースの受領印だったのだが、「北島、お前、ちよっど行って、受領印貰っ



てきてくれ。市役所のすぐ近くだから」と高橋係長に言われ、田島聡の移送費の受領印を栄太郎が貰いにいくことになった。田所はヒアリング中だった。監査ではそのような受領印もチェックされる。監査終了までに受領印を貰えば、それは指摘事項から削除されるのである。だから、高橋係長にしても必死だったのだ。

田島聡のアパートは帰帆市役所の裏手、すぐのところにあつた。田島聡はクローン病という難病を抱えており、遠方の病院まで通院していた。その通院費が高額になるため、随時支給していたのである。

呼び鈴を鳴らすと田島聡はすぐに出てきた。

「済みません、田島さんですか？ 福祉事務所の北島と言います。

田所の代わりに参りました」

「な、何だね、突然に……」

「実は通院移送費の受領印を貰い忘れていて……」

栄太郎は支給明細書を田島聡に見せた。そこには二万円を越える金額が記載されている。

「何だつて？ 私は通院費など一度も貰ったことがないですよ。それに先月は通院していない」

「え？」

「だから、こんな金、貰った覚えはないと言っているんだ」

信じられることではなかった。栄太郎には正直、田島聡がとぼけているのかと思った。

「私はお国の世話になるだけで十分なんだ。通院費まで貰っちゃ悪いですよ。それに持病で通院するのは年に二回くらいのもんですよ。検査を兼ねてね」

「それじゃあ、これは一体……」

「さあ、知らないね。貰った覚えのない書類に印鑑は押せないよ。じゃあ……」

そう言つて田島聡はドアを閉めた。栄太郎は呆然としていた。

(まさか、田所さんが横領を……?)

市役所に戻った栄太郎は事の次第を高橋係長に報告した。

「何だつて？」

普段冷静な高橋係長の顔が青ざめた。そこへヒアリングを終えた田所が事務所に戻ってきた。

「田所、お前、この受領印が貰えないのはどういうことだ。説明してみる！」

高橋係長が支給明細書を田所に突きつけた。田所の手からメモ用紙がはらりと落ちた。

それはやはり横領だった。田所は一時扶助と呼ばれる保護費をケースから申請があったように見せかけ、三文判を用意して自分の懐に入れていたのである。監査の間に一時扶助の台帳はすべて見直しがされた。そこで、田所が四年間で横領した額は二百万円以上にのぼることが判明した。

栄太郎にはショックだった。田所は栄太郎にとって良き先輩であった。高山真治の葬儀の時には的確なアドバイスをくれた。高津栄子の不正受給発覚の時には側にいてくれた。先日も高津栄子の家の片付けを手伝ってくれたばかりだった。栄太郎にとっては頼りになる先輩像そのものだったのである。そんな田所が裏で一時扶助を不正に請求し、懐に入れているなど信じられることではなかった。

だが、それ以上にショックを受けているのは高橋係長だった。高橋係長はいつも地区担当員から報告を受け、彼らを信じ、味方になってくれていた。田所の横領はそんな高橋係長の信頼を裏切る行為だった。

田所の手口は実に巧妙だったが、それは福祉事務所の体制にも問題があると生活援護課からは指摘された。経理と保護の決定が別の班で行われ、その連携が取れていなかった。だから、田所は電算システムで簡単に一時扶助費を入力して、架空の請求を行っていたのだ。

田所の横領は記者発表され、新聞にも載った。当然のことながら、

田所は懲戒免職処分となった。田所の家族が横領した金額を自己弁済したため、起訴は見送られた。

田所は「ほんの出来心でやってみたら、上手くいったのでズルズルとやってしまった。横領した金は遊興費に使った」と白していた。それは帰帆市福祉事務所、始まって以来の不祥事だった。

「辛いなあ……」

ある晩、高橋係長と一杯引つ掛けにいった栄太郎は、普段、弱音を吐かぬ高橋係長がしんみりとそう言ったのを聞いて、田所の一件の傷の深さを噛み締めていた。

田所の不祥事から生活保護班と経理班の関係も見直され、支給に対するチェック機能も強化された。ただ、栄太郎には何を信じていいのかわからなかった。あれだけ信頼を寄せていた先輩にまで裏切られたのである。

だが、高橋係長は「小さくまとまるなよ」と言っただけ課員の士気高揚を煽っていた。

高橋係長から栄太郎が「相談員が新規を抱えすぎているから、お前も手伝ってやってくれ」と言われたのは、監査が終了して間もないのことであった。高橋係長は「新規ケースの開始をするのも勉強の一つだ」と言っているのを聞いて、栄太郎は引き受けることにした。確かにこここのところ、保護率は右肩上がりだった。申請件数も前年度の二分の一増で上がっていた。

その男はフラツとやってきた。酒臭い息を振りまいて。

「おらあ、生活保護受けさせるや！」

男は窓口で怒鳴った。高橋係長が栄太郎に目配せをした。栄太郎はカウンターへ歩み寄った。

「生活保護のご相談ですか？」

「そうに決まってるだろう！」

「そんなに酔っ払っていたら、まともな話し合いができませんね。

後日、改めて来所してください」

栄太郎は穏やかな口調で言った。

「何だと、馬鹿にする気か！ 金なら全部使っちゃった。俺は以前東京の台東区でもホームレスの施設にいたことがあるんだ。お前ら何だかんだ言つて、保護を申請させないつもりだろう！」

「だから、酔っ払って来るといふのがですね……」

「うるさい！」

男は激怒している。何に対して激怒しているのか、よくはわからない栄太郎であった。

「そんな態度で来られても困りますね。あなたは保護を受けたいんでしょう？」

「そうだ、俺には保護を受ける権利がある。権利を主張して何が悪い！ 俺はな、家賃も滞納していて、立ち退きを迫られているんだ」  
男は悪びれもせず、そう開き直った。

「保護を受ける権利じゃなくて、申請する権利だ。保護を決定するのはこちらの役目だ」

助け舟をだしてくれたのは面接相談員の小島だった。小島は男に保護の申請用紙を叩きつけると、踵を返していった。保護の申請用紙に男は名前を記載した。工藤正道という名前だった。年齢は五十六歳である。

「保護を申請する理由は？」

「だから無一文だつて言っているだろう」

「五十六歳と言ったら稼働年齢層ですね。仕事は探しましたか？」

「最近、喉の調子がおかしくてよー」

「それでも酒は飲めるんですね」

栄太郎が皮肉たつぷりに言った。

「生活保護には補足性の原理というのがあります。喉が痛くて働けない。それで酒は飲める。そんな言い訳通用しませんよ。明日、十時にしらふで職安に来てもらいますよ。まずは職探ですよ」

男は汚い字で申請理由に「お金がないため」と書いた。保護申請書、資産申告書、収入申告書、資産調査のための同意書などを徴取

し、工藤正道の生活保護申請の手続きは終了した。早速、住民基本台帳で工藤正道を調べた栄太郎だが、五年前に住民票は職権消除されていた。

翌日の十時過ぎ、工藤正道は帰帆公共職業安定所に現れた。酒は飲んでいないようだった。栄太郎は職安の中で工藤の姿を見つけた。「工藤さん、こっちですよ！」

ごった返す職安の中で、工藤正道はオロオロしていた。

栄太郎が工藤正道を連れて行ったところは専門援助部門と呼ばれる窓口だ。生活保護の受給者や障害者のための窓口だ。

「どんなお仕事をお探ですか？」

職安の加藤という眼鏡をかけた女性が工藤正道に尋ねる。加藤は帰帆職安の専門援助部門に勤務する職業指導官だ。

「えーと、そのー……」

工藤正道が口ごもる。栄太郎にはわかっていただけたのだ。工藤正道は福祉事務所に「職安に行け」と言われたから来ただけであり、本気で職探しをしているわけではないことを。

「何でもできます。警備から旅館の下働きまで」

業を煮やした栄太郎が代わりに言った。

「でもー、喉が痛いんだよな」

酒を飲んでいない工藤正道は気弱だ。

「でも、酒は飲めるんですよ。だったら働けない理由はないですよ。警備のお仕事で検索してもらえますか？」

栄太郎は加藤にそう依頼した。すると、加藤はすぐにコンピューターを叩いた。

「はい、パチンコ屋の駐車場整理なんかどうでしょうか？ マルキョウっていうパチンコ屋で募集しているわよ。でも、警備は人気職種で難関かもね。旅館のフロントの方が確実かしら」

「だったら、そっちのセンでお願いします」

加藤がまたコンピューターを叩く。

「富士見荘という旅館で雑用を募集しているわ。ここなんかいいじゃないかしら。まだ埋まっていないし……」

「そこ、紹介していただけますか？」

栄太郎は身乗り出して、加藤に頭を下げた。その仕草が可笑しかったのだろう。加藤が失笑した。

「まっけてくれ、俺の希望はどうなる？」

工藤正道が口を挟んできた。だが、栄太郎はキツと彼を睨み返した。

「あなたはまず、どこでもいいから働くのが先決です。もし、働いて足りない分は生活保護で足し米をしたっていいんです」

「じゃあ、富士見荘でいいのね」

加藤が電話の受話器を持ち上げた。

「富士見荘さんですか？　こちら帰帆職安の加藤と申します。そちらで募集している雑用、まだ埋まっていますか？　ええ、名前は工藤正道、五十六歳です。はい……、すぐにですか？　わかりました」

電話を切った加藤は「即決よ」と言っ、親指を立てた。そして、求人票の手配をする。

「先方はすぐにでもあなたに来てもらいたいです……。よかつたじゃない」

栄太郎は「すぐに富士見荘へ行ってください」と佐藤正道に指示した。工藤正道は自信の無さそうな顔をしながら、「はあ」と頷いた。

工藤正道が酔っ払って生活福祉課の窓口に見れたのは、その翌日であった。

「おう、北島はいるか！」

「また酔っ払っていますね？」

窓口対応をした栄太郎がきつい目で、工藤正道を見つめた。

「おう、そうともよ。酔って何が悪い。俺にあんな仕事を紹介しや

がって。旅館の雑用など俺は嫌だぞ。俺のプライドが許さん！」

「あの仕事、断ったんですか？」

「おう、そうともよ。断ってやったわ。俺は生保が受けられればいいんだ！」

「却下だ！」

栄太郎の後ろで声がした。高橋係長が怒鳴ったのだ。高橋係長は立ち上がると、ツカツカとカウンターまでやってきた。

「確かにあなたには保護を受ける権利があるかもしれない。だが、同時に稼働能力を活用する義務もあるんだ。権利ばかり主張して義務を果たさない奴にホイホイと保護をかけるほど、こっちも甘くないんだ。現にあなたは金がないと言いながら酒を飲む金はあるんだろ？」

高橋係長は怒りで顔を真っ赤にしていた。

「あんたは俺に死ねって言うのか！」

「そうは言っていないよ。ただ、あんたは稼働能力の非活用で保護却下だ！」

「畜生！俺は東京の台東区でも保護を受けて施設にいたんだぞ！保護を却下するというなら、審査請求（不服申し立て）をしてやる！」

「勝手にすればいいだろう」

工藤正道はもう一度「畜生！」と怒鳴って、引き返していった。

高橋係長はまだ怒りが収まらないのか、握った拳がプルプルと震えていた。

県庁の生活援護課から電話が掛かってきたのは、工藤正道の保護却下が決定して四日後のことだった。

「出ましたよ。工藤正道さんの審査請求」

「やっぱり出ましたか……」

「どうやら、工藤さんの後ろにはホームレスの支援団体がついているようですな。今回の場合、稼働能力の非活用だけではちょっと厳

しいですな。検診命令をかけていないでしょう。工藤さんは足が痛くて働けないと言っている」

「喉の痛みは訴えていましたけどね。足の痛みなんて全然言っていないよ」

栄太郎は開いた口が塞がらなかった。

「それにしても、金がないと言いながら、よく本庁まで行きましたね」

栄太郎は皮肉を込めて言った。

「まあ、審査請求書の写しを送りますので、そちらも弁明書の方、よろしく願いますよ」

生活援護課は「よくも面倒なことを起こしてくれたな」という態度を露にしていた。横領事件の後だけに栄太郎もバツが悪かったのは仕方がないところか。

栄太郎は釈然としない気持ちで電話を切った。高橋係長は「これは裁判だ。絶対にうちが負けるわけにはいかない」と意気込んでいた。

だが、事態は思わぬ方向へと進んだ。

その翌日のことである。二力瀬町役場の福祉課から電話が掛かってきたのは。

「済みません、工藤正道って帰帆市の住民ですか？」

「いえ、住民登録は五年前に職権消除されていますね。アパートは立ち退きを迫られているって言っていましたけど……」

「そうですか、保護の却下通知があったから、てっきり帰帆市の住民かと思いましたがよ」

「工藤正道に何かあったんですか？」

「漁港でね、酒に酔った拳句、転落して水死したんですわ」

「死んだんですか？ 工藤正道が……」

栄太郎は驚愕した。

「ええ、昔のホームレス仲間と漁港で飲んでいましたね。仲間の話



では用を足した時に誤って海に転落したらしいんです。何でも近いうちに生活保護を貰えることになるからと言って、仲間に酒を奢っていたらしいですよ。まあ、帰帆市にアパートがあつて荷物があるなら、そつちでお願いしますわ。うちも無縁仏がそろそろ一杯でしてね。本当は困っているんです。あ、葬儀屋は辰巳屋です」

「ああ、わざわざご丁寧に。それじゃ、こつちで検討してみます」  
電話を切った栄太郎は事の顛末を高橋係長に報告した。

「あいつらしい最後だな。だが、これで審査請求もチャラだ。死んだのは可哀想かもしれんが、うちにとっては良かったな。葬祭扶助だけでも適用してやるか。また民生委員の出番だな」

高橋係長がパソコンに向き直った。栄太郎は工藤正道の死亡を生活援護課に連絡するために受話器を上げた。

住民登録を職権消除されている工藤正道であつたが、本籍は隣の持立市にあつた。そこから、親族を調べだし、息子が持立市内にいることが判明した。栄太郎は市民課の同期を通じ、その連絡先を突き止めていた。栄太郎は早速、息子に連絡を取った。

「そうですか、親父が死にましたか……。よく親父には酔っ払つて殴られたなあ。確執もありましたね。そんな親父でも僕は探していたんですよ。でも、最後まで国の面倒になるのは忍びない。あれでも僕の親父ですからね。こつちで葬儀を引き受けますよ」

息子はそう言ってくれた。栄太郎はまだそんな考えをしてくれる息子がいて、工藤正道は幸せだと思つたものである。工藤正道の態度は許せなかつたが、息子の態度には「この仕事をしていてよかつた」と思う栄太郎であつた。

「だから、何度も言っているじゃないですか。来月の保護費で今月分の過払いを調整させてもらつて」

電話口で、栄太郎は口を尖らせていた。その口調は懇願するようではあつても、栄太郎の顔は鋭く電話を見つめている。その瞳はどこか恨めしげだ。

「だから、来月の保護費は今月より少なくなります」

栄太郎がそう言った途端、離れた距離でも罵声とわかる声が受話器から漏れた。栄太郎は苦虫を潰したような顔を見ると、メモ用紙に書いた丸を黒く塗りつぶし始める。

「収入があつたんだから仕方ないでしょう。それとも何ですか、収入を申告しないで不正に生活保護を受けた方がいいとおっしゃるんですか！」

今度は栄太郎が声を荒げた。事務所の空気に緊張が走る。その緊張を解いたのは、ほかならぬ栄太郎であった。

「あなたがそんなことをできないことは、僕が一番よくわかっていますよ。ね、今月は収入があつたんだし、やりくりしてください。働き始めることはいいいことじゃないですか。自立の助長が生活保護の目的なんですから、頑張ってくださいよ。応援していますから」

そう言い終え、栄太郎は受話器を置いた。そして、「ふう」と軽いため息を漏らすと、ぬるくなったコーヒーを口に含む。砂糖もミルクも入れないブラックコーヒーの方が、ぬるくなっても栄太郎には飲みやすかった。栄太郎はそのまま電卓を叩いた。保護費はコンピューターが自動で計算してくれる。しかし、やはり手計算で確認してしまふ。そして調書を難しそうな顔で睨むと、「うーむ」と唸った。

「来月は大分、少ないな……」

栄太郎は記録紙にペンを走らせると、決裁欄に自分の印鑑を押した。そして、パソコンに向かい、数字を打ち込む。栄太郎の大きな瞳が線のように細くなった。二月二十四日のことだった。

その時だった。栄太郎のデスクの電話が鳴ったのは。

「北島さんに、愛向会病院からお電話です」

電話交換手のその言葉を聞いて、栄太郎は嫌な予感がした。愛向会病院といえば、暴力団の小山藤吉が入院している精神病院だ。

「はい、北島です」

「あ、もしもし、北島さん？ 愛向会病院のケースワーカーの野地

です」

「ああ、いつもお世話になっております」

「小山さんの件なただけどね、中途半端に意識があるもんだから、保護室に入れさせてもらいますよ」

「ああ、そうですか」

「ああいうヤクザなのが中途半端に意識を回復すると、始末が悪いね。それとね、シモの方が緩くなってきているので、オムツを付けさせてもらいますよ。オムツ代、よろしく願います」

「わかりました。病状調査も兼ねて、意見書をお届けにあがります  
栄太郎は手帳を捲った。直近で明日の午後が空いている。

「明日の十四時くらいに伺ってもいいですか？ できれば主治医の先生からお話を伺いたいのですが……」

「いいですよ。主治医との面談はちょっとお待ち頂く様になるかもしれません」

「その間に本人と会いますよ」

「それでは、明日の十四時にお待ちしています」

栄太郎は電話を切った。ぬるくなったブラックコーヒーを啜った。

その男はフラツとやってきた。かなり血色の悪い初老の男だ。その身は痩せこけている。

「済みません。生活保護の相談をしたいんですけど……」

男は力の籠っていない声を震わせ、受付カウンターで立ち尽くしていた。栄太郎が面接相談員の小島を見た。小島はやはり来所中の無料低額宿泊所の相談にかかりつきりだった。

栄太郎は椅子から立ち上がると、その男に歩み寄った。

「どういうことで、お困りですか？」

栄太郎が仕草で男を椅子に座るよう促した。男が申し訳無さそうに座った。

「香山新吉と言います。実は電気も停められていて、蠟燭で暮らしているんです」

香山新吉は頭をボリボリと掻きながら、恥ずかしそうに言った。

「お歳はおいくつですか？」

「六十八歳になります」

「年金は？」

「実は年金を担保にお金を借りていまして、再来年まで年金が入ってこないんです」

「年金担保は医療福祉機構から借りたんですか？」

「はい。親族で葬儀が重なったもので、何かと入用で……」

「そうですね。基本的には年金担保で借金をしている場合、生活保護の適用は難しいんですがね。あなたの場合、二ヶ月でいくら貰える計算になりますか？」

「そうですね。二ヶ月で三十四万円ほどだったでしょうか……」

「すると厚生年金ですね？」

栄太郎が香山新吉の顔を覗き込んだ。

「はい……。定年になるまで隣の持立市にある三和重工に勤めていました」

「そうですね……。で、いくらぐらい年金担保で借りられたんですか？」

「三百万円ほどです」

「そのお金も底を尽きたと……」

「はい。恥ずかしい話なんです……」

「まあ取り敢えず、申請書一式を書いてもらいましょうか」

香山新吉が申請書を書いている間、栄太郎は最低生活費（保護費の国の基準）を試算した。年金は偶数月に二か月分まとめて支払われる。香山新吉の一回に振り込まれる年金の額が三十四万円だとすると、一ヶ月あたりの年金額は十七万円ということになる。

「ところで香山さん、お家賃は？」

「三万円です。実は家賃も滞納していて、大家からは立ち退きを迫られているんです」

「そうですね。しかし、親族の葬儀だけで三百万円も使うもんです

かねえ」

「実はパチンコと競輪に凝ってしましてね……。お恥ずかしい話で……」

「つまりはギャンブルのツケを税金で払えと……」

「申し訳ございません！」

香山新吉がその場に土下座した。栄太郎はやりきれない顔をしながら、「頭を上げてくださいよ」と言った。そして、続ける。

「年金担保借入の場合は基本的に国で定めた最低生活費と本来支払われる年金額を比較して要否判定という保護が必要であるかないかの判定をします。年金額が最低生活費を上回れば、保護は適用されないのが原則なんです。香山さんの場合は年金担保借入したお金を遊興で浪費してしまつた。年金担保の取り扱いについては、こちらで検討させていただきます。基本的に保護申請から決定までは十四日以内に行われることとなりますが、資産等の調査に時間がかかる場合もありますので、そうした場合には三十日まで延長できることになっているんです。香山さんの場合は念入りな調査が必要でしょうね」

栄太郎のその言葉に香山新吉は頭を項垂れるしかなかった。栄太郎は申請書一式を受け取ると、席に戻ろうとした。

「待つてください。今日どうするかのお金もないんです！」

香山新吉は悲痛な面持ちで立ち上がった。高橋係長が目配せをした。栄太郎が頷く。

「しょうがないですねえ。社会福祉協議会の助け合い資金を紹介しますから、そちらで相談してください」

香山新吉の顔が緩んだ。

小山藤吉の病状調査で愛向会病院に栄太郎が赴いたのは、翌日の午後のことだった。

病院の受付ではケースワーカーの野地が待っていてくれた。

「いやー、小山藤吉にはほんと困っていますよ。身体がまだ麻痺

しているのに、他の患者を恫喝するんですからね」

「ふふふ、保護室がちょうどいいんじゃないんですか？」

「まあ、覚醒剤の後遺症もあると思うんですがね。最近、妄想も激しくて……」

野地に案内された栄太郎は閉鎖病棟と呼ばれる外部とは遮断された病棟に足を踏み入れた。閉鎖病棟の中では多数の患者が意味もなく徘徊をしていた。目のギョロついた男が寄ってきて、栄太郎に「あんた誰？」と尋ねた。栄太郎は「役所から来ました」と言っ、その男の横を擦り抜けた。

保護室はお粗末なナースステーションの脇にあった。鉄の固い扉が閉鎖的な世界の中で、更に閉鎖性を強調していた。

一人の看護師が鍵を開けた。そこにいたのは紛れもなく小山藤吉だった。オムツを穿かせられ、拘束衣を纏っている。その口からは涎が垂れていた。それでも小山藤吉は栄太郎の姿を見ると「何じゃ、われー！」と悪態をついてきた。どうやら、生活保護の担当だったことは覚えてはいないようだ。

「小山さん、僕のこと、覚えていないんですか？」

「ああ？」

小山藤吉の目は宙を泳ぎ、焦点は合っていないようだった。

「終始、こんな感じなんですよ」

野地が苦笑する。栄太郎は狭い保護室の中を見渡した。床には布団が敷かれ、部屋の片隅に和式便器がある。

「私は医者じゃないので、何とも言えませんがね。まあ、ここがこの人の終の棲家になるかもしれませんね」

野地が小山藤吉を見下ろしながら言った。

「生活保護は医療費が全額負担ですからね。ヤクザやってシヤブまでやった人を税金で救済しなければならぬ。まあ、今まで好き放題やってきたんだから、最後までい惨めでもしょうがないですかねえ」

野地のその言葉には皮肉が込められていた。栄太郎は言っ、やり

たかった。「できるなら、一服盛ってやってください」と。だが、そんなことは口が裂けても言えない栄太郎であった。

(月夜ばかりじゃねえぞ)

以前、小山藤吉に言われた台詞を、栄太郎は心の中で吐き棄てた。そこへ主治医の新山がやってきた。

「ああ、うまく時間調整が取れましたよ」

野地が笑った。主治医が「小山さん、どうですか？」と尋ねると、小山は「うるせー、馬鹿野郎！」と怒鳴った。それは恫喝することが、彼のアイデンティティーにも思える栄太郎であった。

ナースステーションで主治医の新山からの病状説明は行われた。

「まあ、小山さんは覚醒剤のやりすぎで脳に大きなダメージを負っていますのでね。意識が戻ったと言っても、回復の見込みはないでしょう」

「つまり、在宅生活は無理だと?」

「ええ、在宅に戻れるくらいなら、保護室になんか入れませんよ。まあ、入院継続が妥当ですな。周囲の患者は恫喝するくせにオムツ無しでは生活できないような状況です。ヤクザも年貢の納め時ですな。しょうがないからうちで最後まで面倒見ますよ。うちみたいな病院もないとね……」

新山はそう言い放つと、不機嫌そうに席を立った。新山が小山藤吉の入っている保護室をチラツと見た。そこからは「ああ」とか「うう」とかいう呻き声が聞こえていた。

栄太郎は思う。もし、この独房のような保護室の中で小山藤吉が人生の最後の時を迎えたとしたら、それも立派な孤独死の一種だろうと。

愛向会病院から帰ってきた。栄太郎のところに早速電話が舞い込んできた。電話の主は香山新吉だった。

「昨日、社会福祉協議会でお金を三万円ほど借りたんですが、今日、それを落としてしまって……」

「落としたあ？ じゃあ警察に紛失届を出さないと……」

「えー、それが、そのー……」

香山新吉が口ごもる。

「何を躊躇しているんですか？」

「済みません。競輪の券売機の中に落としてしまったんです」

栄太郎は呆れて返す言葉もなかった。

「じゃあ、電気は……」

「まだ止められたままです」

「これじゃあ、生活保護を支給してもギャンブルに注ぎ込んでしま  
うんじゃないんですか？ 悪いけど、あなたは信用できない。くれ  
ぐれも蠟燭で火事など起こさないようにしてくださいよ」

電話の向こうから競輪場のファンファーレが聞こえてきた。それ  
が栄太郎の怒りに火に油を注いだ。

「兎も角、あなたの生活保護はこちらで慎重に検討させてもらいま  
すから！」

栄太郎はそう言い放つと、乱暴に電話を切った。

「随分とお冠だな」

高橋係長がニヤニヤ笑いながら、栄太郎を見た。

「新規の香山新吉ですけど、社会福祉協議会の助け合い資金を競輪  
でスツたようなんです」

「馬鹿な奴だなあ」

「係長、急迫の定義って何ですか？」

「ん？」

「年金担保の取り扱いでも、暴力団の場合でも『急迫の場合を除き』  
つてありますよね。つまり急迫であれば年金担保をしても保護  
が適用になる。でも急迫の定義があいまいな気がして」

「それはだな……」

高橋係長が後ろを向き、一冊の分厚い本を取り出した。

「これだ。『生活保護法の解釈と運用』、この本の中の百二十二頁  
に『急迫した事由がある場合』というのがある」



栄太郎はそれを食い入るように見つめた。そこには「生存が危うくされるとか、その他社会通念上放置し難いと認められる程度に情況が切迫している場合。従つて、単に最低生活の維持ができないというだけでは、必ずしもこの場合に該当するとは言えない。如何なる場合がこれに該当するかは、事実認定の問題であるが、概して云えば子供とか、不具廃疾者とかは扶養義務者が扶養しないというだけでこの状態に陥ることが多く、又成年者でも病気の場合にはこの状態に比較的早期に陥る可能性が多いであろう。（原文のまま）」とあつた。

「この『生活保護法の解釈と運用』は法制定時に発行されたものだ。それが未だ根拠として十分通用するものとなつている」

「この社会通念上放置し難いと認められる程度つてというのが曲者ですな」

「具体的には障害者や未成年者が放置されている状況を考へてのことだ。それと重度疾病を持つている病人だな。助け合い資金をギャンブルに注ぎ込んで、それで急迫はないだろう。もともと支給されるはずの年金額も最低生活費を上回るし、今回は保護を却下せざるを得ないな」

「でも、電気が止められているんですよ」

「急迫保護の考へ方は最近、変わつてきていて、電気が止められたり、生活が困窮したりしているからと言って、安易にかけすぎるきらいはあるよ。だが、『生活保護法の解釈と運用』にも書いてある通り、単に最低生活が維持できないというだけでは急迫に該当するとは言えないと思うな。一度廃止して、また入院で保護を開始した小山藤吉なんかは急迫保護だと思つけどね。まあ香山新吉についてはケース検討を行おう。そこで福祉事務所としての見解を出そうじゃないか。前の工藤正道みたいに審査請求されても面倒だ。却下する根拠を固める必要があるな。ところで親族はいるのか？」

「兄が市内に住んでいます。それと離婚した妻に引き取られた娘が、やはり市内に……。いずれも仲は悪いようですが……」

「あの歳で兄と言ったら、年金生活者か……。援助は厳しいだろうな。頼れるのは娘だな」

高橋係長が仏頂面をして呟いた。

その知らせは香山新吉のケース検討をしている最中に飛び込んできた。

「大変です。香山新吉の家が火事だそうです」

電話に出た小島が慌てていた。

「やっぱり火を出したか！」

高橋係長の顔が曇った。栄太郎はすぐに席を立ち、上着を掴んだ。「待て！」

栄太郎が飛び出そうとするのを高橋係長が制した。

「今、我々が行ったからといっても、何の問題解決にもならん。今は腰を据えて状況を見守るしかない。もし、救急搬送されていれば病院から連絡がはいるはずだ。その時は急迫保護してやるんだな」

しかし、事態は深刻だった。香山新吉と思しき男の焼死体が焼け跡から発見されたのだった。栄太郎は身元確認のため帰帆警察署まで赴いたが、その焼死体は焼け焦げた肉の塊であり、それが果たして香山新吉なのかどうかはわからなかった。香山新吉の兄、香山新吾も駆けつけてくれたが、十年来会っていないとのこと、何も確証になるものは得られなかった。

「歯形の照合しかありませんかねえ」

瀬田という刑事は面倒臭そうに呟いた。栄太郎は思う。もしも社会福祉協議会で借りた助け合い資金をギャンブルに注ぎ込まず、少しでも電気代に充てていたら、香山新吉はこんな非業な最後は遂げずに済んだであろうと。

「お兄さん、葬儀は親族でお願い致しますよ」

栄太郎は香山新吾にそう伝えた。すると、香山新吾の顔が歪んだ。「こんな奴のことは知らん。ギャンブルに明け暮れて身を滅ぼしたんだ。自業自得ですよ。こんな奴のために行政があるんじゃないで

すか？」

「それは違います。ギャンブルで身を滅ばした人のために何で税金を使わなきゃいけないんですか？ 扶養親族がいるわけですから、葬儀は親族でやってもらいます」

栄太郎はきつぱりと言い切った。香山新吾はブツブツと言いながらも、「弟の娘と相談します」と言った。

「生活保護も決定していないし、これ以上、福祉では関わられませんからね」

そう言い放つと、栄太郎は帰帆警察署を後にした。早く、その場から立ち去りたかったこともあるが、親族の義務までも放棄して、行政にすべてを押し付けてくる香山新吾の姿勢が見え隠れしたため、きつぱりと言い放ったのだ。

だが、本当の問題はそれからだった。翌日の新聞に香山新吉の焼死の件が載り、「生活保護を申請したが、電気が停められ、蝋燭での生活を余儀なくされ、火事となり死亡した」と書かれていたのだ。これは福祉事務所に対するイメージダウンであった。

「うーん、先日も横領があつたばかりだから……」

高橋係長は頭を抱えていた。

早速、県の生活援護課からも調査が入り、保護申請の経緯とその後に対応が問われた。

「香山新吉には社会福祉協議会の助け合い資金を紹介しました。そこで当座の生活費とし

て三万円支払われているんですよ。それを彼は競輪に注ぎ込んでしまったんです」

栄太郎は生活援護課の職員に力説した。少々、口を尖らせて。

「その時、少しでも電気代の支払いに充当していれば焼死は免れたでしょう。我々も電力会社に連絡を入れておきましたからね」

「なるほど、おたくの対応に瑕疵はなかったと……」

生活援護課の職員は眼鏡の奥から栄太郎を見つめていた。栄太郎は生活援護課の職員を見つめ返した。

木島愛子の出産が近づいていた。

「この際だから、元気なお子さんを産んでくださいよ」

栄太郎は家庭訪問の際に木島愛子に、そう声を掛けていた。木島愛子は特に息子たちの心配をすることもなく、サバサバとしていた。だが、出産は入院を伴う。栄太郎はその間の息子たちの心配をしていた。木島愛子に尋ねても、「どうしましょうかねえ……」と気のない返事が返ってくるのみであった。

木島愛子は実家とは深刻な断絶状態が続いている。祖父母に息子たちの面倒を依頼するのは困難であった。そこで、栄太郎は児童相談所を通じて、息子たちの児童養護施設への一時入所を打診した。すると、三徳園で受け入れをしてくれるという。

栄太郎は息子たちを三徳園まで送っていった。

「ママ……！ どこにも行かないでーっ！」

息子たちは木島愛子とのしばしの別れに、不安と悲しみを隠せずに泣いた。栄太郎の胸が痛んだ。

（ネグレクトの通報を受けるような母親でも、やっぱり母親なんだ……）

栄太郎が三徳園に行くと高津貴の姿が目についた。髪はやはり黒く、また茶色に染め直しているようなことはなかったのである。

「どうだい、その後は？」

「その節はお世話になりました。元気にやっています」

高津貴は爽やかな笑顔で、そう返した。

「そうか……。しっかりやれよ」

「はい」

栄太郎は木島愛子の息子たちを職員に引き渡した。

「おじちゃんも行っちゃうの？」

息子たちは不安げな表情を隠せずにいた。だが、栄太郎は「お母さんが赤ちゃんを産むまでの間だよ。またすぐにママに会えるから」と優しく声を掛けてやった。

栄太郎の心の中は釈然としない。息子たちをここまで不安におとしめて、悪びれる様子もない木島愛子の態度が気に入らなかつた。一時の快楽に溺れ、相手の男さえわからぬ妊娠という無責任な行動を取った木島愛子の態度が……。

木島愛子はその四日後に、無事に男子を出産した。木島愛子からも病院からも連絡があつたのである。栄太郎は木島愛子に「お疲れ様。おめでとう」と言った。だが、栄太郎の中では「果たして望まれて産まれてきた子どもだろうか？」という疑念が渦巻いていた。これまで幾多の死を見つめてきた栄太郎ではあるが、釈然としない出産はまた、栄太郎の心に翳りを落とすのだった。

（いかん、いかん。こんなこと気にしていたら……）

栄太郎は気が落ち込みそうになると、家に置いてある買ったばかりのエレキギターのことを思い出していた。

## 許し父

その日の昼休み過ぎ、栄太郎のデスクの電話が鳴った。

「はい、もしもし」

「北島栄太郎さんでいらつしやいますか？」

聞き馴れない男の声だ。栄太郎は一瞬、何かの電話セールスかと疑った。

「はい、そうですが」

「突然のお電話、失礼致します。私は県の笹熊福祉事務所の澤井と申します」

栄太郎はその名前を聞いて、嫌な予感がした。その澤井さんは続ける。

「実はお父様の長太郎さんが、お亡くなりになりました」

「ふーん、父が？」

そう言う栄太郎の口調は、かなり突つ慳貪だったかもしれない。

「お父様と栄太郎さんとの関係が悪かったことは、私も存じ上げております。ただ、お父様は身寄りが他にいないんですよ。お葬式だけでも上げて戴けないかと思ひまして」

「あんな奴、父親でも何でもありませんよ！」

栄太郎は口調を荒げた。受話器に自分の唾がかかるのがわかる。

「それでは、せめてお骨だけでも引き取って戴けませんでしょうかね？ 私どもは葬儀まではできても、お骨までは預かれないんですよ」

その相手の言い分がわからないでもない栄太郎だったが、その言葉がやや事務的に聞こえた。栄太郎は生活保護の地区担当員として葬儀絡みでは苦労も重ねてきた。だが、彼と父との確執は簡単に解れるものではなかったのである。この時の栄太郎は完全に頭に血が上っていた。

「いい加減にしてください。何で今更他人の骨を引き取る必要があ

るんですか？」

後々考えれば、それはケースの親族に言われ続けてきた台詞なのだが、どうしても言わずにはいられなかった。

「そうは言ってもね、お父様、最後は栄太郎さんに会いたって言うていましたよ。好きだったお酒も断って、いつも家族の写真を眺めていたんですよ。最後は湯鶴町の自宅で亡くなっているのを、ヘルパーさんに発見されたんです」

そう言う澤井の声は、どことなくしみじみとしていた。だが栄太郎には父が酒を断ち、家族を思い出す姿など想像できない。

「ちよつと、考えさせてください」

「お父様は明日、荼毘に付されます。できれば今日の夕方までにご連絡戴けますか？」

「わかりました」

栄太郎は電話を乱暴に切った。同時に胸の中にドロドロとした感情が渦巻く。

栄太郎は父が湯鶴町で生活保護を受けていたことは知っていた。

栄太郎が生活福祉課に勤務する以前の話だが、笹熊福祉事務所から、栄太郎のところに「扶養届」なる文書が送られてきたこともある。

もちろん栄太郎は、扶養はできないし、する気もない旨を記載して返送した。

ちなみに郡部は県の福祉事務所が生活保護を所管している。湯鶴町は笹熊郡にあたるから、笹熊福祉事務所が生活保護の所管をしているのである。

栄太郎は湯鶴町の土井というところで生まれ、高校生の時までそこに住んでいた。

土建屋で働いていた父は、酒を飲んでは、よく母の昭子に暴力を振るった。雨で仕事が休みの日など、朝から酒を飲んで絡んできたものだ。母の話では、給食費が酒代に消えたこともあったらしい。今で言えば、父、長太郎の暴力はドメスティック・バイオレンス

(配偶者・恋人からの暴力)と言ったところだが、当時はそんな言葉もなかった。

長太郎の昭子に対する暴力に理由などなかった。「家事が遅い」だの「酒が足りない」だの、ただ因縁をつけては、ひたすら暴力を振るっていたのだ。昭子はただじつと、長太郎からの言われ無き暴力に耐えていたのである。栄太郎もまた、そんな昭子が殴られるのを黙って見て、怯えながら耐えるしかなかった。子供心にも、自分が大人になったら、父のようにはなるまいと思ったものである。いわゆる反面教師というやつだ。

だがそんな昭子も、ついに堪忍袋の緒が切れる時が来た。栄太郎が高校を卒業すると同時に、栄太郎と一緒に帰帆市に家出したのだ。栄太郎は持立市にある大学に進学が決まっていた。学費の面では母の昭子に苦勞をさせたと思う。身を潜めたのは安いボロアパートだった。栄太郎も必死にアルバイトをして学費を稼いだものだ。

湯鶴町の家も安い平家の借家だったので、住めば都だった。その後、昭子は長太郎との離婚に向けて、裁判を起こすことになるが、それから長い道程だった。家庭裁判所の調停まで二年はかかったと思う。

栄太郎が帰帆市に来てからは、一度も湯鶴町に足を向けていない。湯鶴町は昭子や栄太郎にとって「鬼門」だったのである。そればかりではない。いつしか、西へ向かうことさえ、忌み嫌うようになっていた。

だがこのところ、昭子もようやく明るさを取り戻してきた。今は午後のみ、スーパーで清掃のパートをしている。六十を過ぎた母の年齢から考えれば、使ってくれるところがあるだけでも有り難い。いわゆる、生きがいとしての仕事だ。

問題は先程の福祉事務所からの電話を、どう母の昭子に伝えるかだ。栄太郎は虚ろな目を天井に泳がせた。

その数分後、栄太郎と高橋係長は市役所の裏手、灰皿の前にいた。



「そうか……。親父さんが湯鶴町で生保をな……」

高橋係長が煙を吐き出す。

「まあ、この仕事に関わっているんだ。最後までいい面倒見てやれよ」

「はあ、でも自分の気持ちがついていかなくて……」

「親族の気持ちが変わっただろう。そして、お前は無縁仏に入れられた仏さんを目にしてきた。その哀れな末路も知っているはずだ。」

それに香山新吉の時、兄にこり押ししたのは誰だっけ？」

高橋係長の目はいつになく厳しかった。

「はあ……」

栄太郎はため息のような、気のない返事をする。確かに今まで見てきた孤独死で最後は無縁仏に入れられ、生きていた証さえも抹消されていくようなケースをいくつも見てきた栄太郎であった。しかし、だからと言って父親の存在を許せるわけでもなかった。栄太郎の心はいっぺんに何色もの絵の具を流し込んだような、混沌の色を湛えていた。

「後悔だけはするなよ」

そう言っつて、高橋係長は煙草を揉み消した。その台詞は以前に栄太郎が高津貴に言った台詞と同じだった。栄太郎は缶コーヒースズと啜った。

ギィーツ……。

建て付けの悪い、安普請のドアが開く音がこだまする。どうやら昭子が帰宅したようだ。

「母さん、お帰り」

「あら、栄ちゃん、帰っていたの？」

昭子が驚いたような顔で栄太郎を見た。

「ああ、今日は残業しなかったんだ」

「そうよね。いつも栄ちゃん、残業大変だもんね」

昭子がスーパーのビニール袋から夕食の食材を取り出し、冷蔵庫に入れる。その後ろ姿が平凡で、どこにでもありそうな幸せだった。

栄太郎は怖かった。もし長太郎の死を昭子に伝え、この平凡な幸せが、一瞬で脆くも崩れ去ったとしたら。そう思うと、躊躇わざるを得なかった。

それでも昭子の耳には一応入れておかねばなるまい。栄太郎は意を決し、昭子の背中に声を掛けた。

「あのさあ。さっき、福祉事務所の澤井さんって人から電話があったんだけど、親父が死んだらしいよ」

昭子の背中が一瞬、ビクツと跳ねた。開け放した冷蔵庫の冷気が伝わる。昭子の手にはネギが握られたままだ。

「そう……」

昭子はそう呟くと、ネギを冷蔵庫に仕舞った。そしてそのまま俯き、固まってしまった。

沈黙の時間が流れる。張り詰めた空気が、異様に重かった。

「福祉事務所は骨を引き取ってくれて言っていたけど、あんな奴の骨を拾ってやらなくてもいいよね？」

緊張に耐え切れず、思わず栄太郎は昭子に同意を求めた。これが栄太郎の本心だ。

しかし昭子は「はあーっ」と深いため息をつく、意外な言葉を返したのである。

「あんな人でも、栄ちゃんのたった一人の父親なんだよ。私にとっては、もう赤の他人だけどね。お骨を拾ってやるか、やらないかは、栄ちゃんが自分で決めて頂戴」

昭子は栄太郎に背中を向けたまま、力のない声で言った。

栄太郎は混沌とした自分の気持ち、更に掻き乱されたような気がした。

「だって、母さんにあれだけ暴力を振るった親父じゃないか。僕だって耐えていたんだ。母さんが殴られているのを、ただ怯えて見ているしかないのを。僕だって辛かったんだ。だから、あんな親父なんか死んだって関係ないさ。そうさ、あいつは親父なんかじゃない！」

栄太郎は一気に巻くし立てた。

昭子は何も言わず、そのまま台所へ行き、夕食の準備を始めようとする。

「母さん、何か言ってくれよ！」

本当はこれ以上、昭子を追い詰めてはいけないことは承知していた栄太郎だった。しかし、意外な昭子の言葉に混乱を来した栄太郎の頭は、目の前にいる母に救いを求めるしかなかったのだ。

「だから言っただろう。お前の父親のことなんだから、お前が決めなさい。もう大人なんだから」

「そんなこと言っただって……」

「ひとつだけ言っておくわ」

昭子がやるせない顔をして振り返る。その表情は長太郎と暮らしていた時の、暗く淀んだ昭子の表情だと栄太郎は思った。栄太郎はこの時、少しばかり母を追い詰めてしまったと後悔した。

「何だい？」

「お父さんとお母さんはね、あれでも好いて一緒になった仲間だよ。あんな人でもね、逃げる時は本当に後ろ髪を惹かれる思いだったんだよ。あの人はね、誰かが側についていなきゃ、だめな人なんだよ」

昭子がエプロンで臉を拭った。目尻にできた小皺が光っている。

栄太郎はまだ昭子が長太郎を愛していることを知った。しかしこの時、正直なところ、栄太郎には母の気持ちが理解できなかった。ただ、昭子が栄太郎に長太郎の遺骨を拾ってほしいと訴えているような気がしてならなかった。昭子の願いとならば、聞いてやらねばなるまい。栄太郎はそんなことを思った。

（澤井さん、まだ残業しているかな？）

栄太郎は電話の受話器を持ち上げて、自分を確かめるように数字を押す。電話のコールが異様に長く感じられた。

「お待たせしました。笹熊合同庁舎の警備の者ですが……」  
無骨な男性のしわがれ声に後押しされて僕は言った。

「時間外に済みません。福祉事務所の澤井さんをお願いします」

翌朝、喪服に着替えた栄太郎は電車に飛び乗った。長太郎の火葬は十三時半から、二力瀬町にある火葬場で執り行われるという。湯鶴町は二力瀬町に隣接する自治体で、水道や火葬場などは合同となっていた。

朝の電車は混み合っていた。百日台駅から乗っても、既に空いている席はない。昨夜はあまり眠れなかったので、二力瀬駅まで立ちっぱなしは少々きつい。

だが帰帆駅でドツと人が降りた。栄太郎は対面式シート of 窓側に座ることができた。以前は硬く、座り心地が悪かったシートも、今は改良されている。しかしお尻の辺りがモゾモゾとして、座り心地が良いわけではなかった。それは栄太郎が長太郎に会いに行くのを、心の奥底で拒んでいるからに他ならない。決してシートのせいではなかった。

帰帆駅を過ぎると、左手には海が広がる。深い青に太陽の光が眩しく反射し、銀をちりばめたようだ。栄太郎は思わず目を細めた。磯場には波が豪快に打ち付けられる。

観光客にとっては絶景であるこの景色も、今の栄太郎にとっては重苦しい、淀んだ景色に過ぎない。磯場に打ち付ける白波もまるで牙のようだ。それは線路が進むにつれ、僕の心に重くのしかかってくる。

ふと、深海の海底に降り積もるマリンスノーのイメージが栄太郎の中に浮かんだ。それは決して綺麗なものではなく、栄太郎の胸の中に降り積もりながら、淀んでいく澱だった。

二力瀬駅に着いた時、栄太郎はどうしようもない不安に駆られた。  
(ついに来てしまった……)

そんな思いでホームを踏み締める。電車が去った後、弓なりに曲がるホームを見渡すと、まばらな人影が改札へと降りていく。喪服

を着ているのは栄太郎くらいだ。

（そうだ。誰も親父の葬儀に来たりはしない。来るはずがない）

そう思いながら栄太郎は階段を下った。駅は高津栄子の調査で訪れた時と変わりはない。そう、昔と変わったことと言えば、いつの間にかエスカレーターとエレベーターが設置され、改札も自動改札になっている。

火葬場は二力瀬駅のちょうど駅裏あたりにある。歩けば四、五分といったところか。

（まだ早いな）

何せ、朝食を済ませてすぐに家を飛び出してきたのだ。長太郎の火葬の時間は十三時半だ。時計を見るとまだ午前十一時だった。

（どうしようかな？）

こういう時の時間つぶしは一番困ると栄太郎は思った。

食欲はまったくなかったが、駅の脇の売店でサンドイッチを二つと缶コーヒーを買う。まだ胃の中には朝食が残っている感じだった。それでも何か物事の前には、しっかりと食べておかねばならない。小さい頃、食費が父の酒代に消え、ひもじい思いをしたこともあった。栄太郎であった。

食事は愛を表すという人もいる。いつも家の食事は貧しかった。それでも昭子は工夫して、栄太郎に精一杯の愛情を注いでくれた。だが、食べ盛りの栄太郎には少ない量だったのである。それは片親しかいない寂しさに、どこか似ていた。

だから栄太郎の食へのこだわりはトラウマのひとつなのかもしれない。そう、満たされないお腹と心を常に一杯にしておかないとならないという、強迫観念に近いものとも言えるだろうか。

栄太郎はサンドイッチと缶コーヒーの入ったビニール袋をぶら下げて、駅前の地下道を潜った。魚の絵が描かれたその地下道は、その暗さと相俟って、まるで深海の中にいるような気分だ。栄太郎は先程の心に降り積もるマリンスノーのような澱を思い出す。

地下道を抜けると栄太郎は迷った。二力瀬漁港の方へ行こうか、

それとも海岸の砂浜の方へ行こうかと。

結局、僕の足は海岸の方へ向いた。なだらかな坂を下り、二力瀬町役場の前を通る。そして今度は少し急な坂を下れば海岸だ。坂の途中で湾曲した砂浜が見えてきた。

そこは砂浜だ。坂から見ると奥の方にゴロタ石の岩場が少しある。この海岸も夏になれば海水浴客で賑わう。

栄太郎は小学校高学年から中学校くらいにかけて、よくこの辺りまで自転車できた。

栄太郎は砂浜に下りる階段に腰を降ろした。

寄せては返す波を、ただボーツと眺める。二力瀬道路の橋がのどかな風景を邪魔しているようにも思えるが、これを名所とする声もある。

(物は考えようだな……)

自然と人工物が織り混ざった風景に、ふと、そんなことを考えたりもした。

栄太郎はビニール袋からサンドイッチを取り出すと、頬張った。シャキシヤキのレタスの食感が心地よい。

砂浜では一人の老婆が何かを拾っていた。貝殻のような乙女チックなものではないだろう。手にしているのはどう見てもゴミだ。

(ゴミ拾いかな?)

そう思いながら栄太郎は眺める。老婆は黙々とゴミを拾っている。栄太郎に気付いた老婆が、人懐っこい笑顔を湛えて近づいてきた。だがその視線は栄太郎の手にあるサンドイッチへと向けられている。「縁起の悪そうな服を着ている割には、美味しそうなもの食べているね。あたしゃ、もう二日、何も食べていないよ」

ボサボサの白髪頭に、皺だらけの老婆は笑顔でそう呟いた。その言葉に切迫感はなかったが、空腹であることに違いはないだろう。

「よかつたら、お婆ちゃんも食べる?」

栄太郎は残りのサンドイッチを差し出した。

「あたしゃ、これでも若いんだよ。『お婆ちゃん』なんて呼ばれる

「齢じゃないんだ」

老婆のプライドは思ったより高いようだった。それでも笑顔は絶やさない。

「でも、ありがとさん。せっかくだから、もらっておこつかね」  
狡猾だが、どこか憎めない老婆は、皺だらけの顔を更に皺くちやにして笑った。

栄太郎も思わず苦笑して、サンドイッチを渡してしまった。

「あー、やっとオマンマにありつけたよ。あんた、いい男だね」  
「それはどうも」

どうやら老婆にとって、サンドイッチが一番の収穫だったらしい。彼女は重たそうな体を引きずりながら、漁協本部の向こうへと消えていった。その風景がまるで昭和時代の映画フィルムのようにであった。

栄太郎が老婆を見送っている間も、海からの潮風は栄太郎の髪を撫で続けた。

何故か老婆の姿が心に焼き付いた。毒づきながらも礼を言い、僕を「いい男」と呼んでくれた老婆とのひときは、火葬場に向かう前のちよつとした息抜きになったような気がした。

栄太郎は海をもう一度、見渡すと海岸を後にした。

駅に戻って歩道橋を渡り、二力瀬中学校の前から駅の裏の方へ回って歩く。この辺りも、栄太郎が昔はよく自転車で来た場所だ。

栄太郎は火葬場の前で立ち止まった。小綺麗になった火葬場は何か父には不釣り合いな気がする栄太郎だった。

栄太郎は火葬場の前で立ち止まり、呼吸を整えようと、大きく深呼吸をした。それは大きなため息だったかもしれない。先程の老婆との会話で少し気持ちが和んだとはいえ、やはり棄てた父と対面するのは緊張するものだ。

「北島栄太郎さんですね？」

火葬場の入り口にいた喪服姿の若い男が歩み寄って来た。いかに

も温和そうな好青年といった印象だ。齢の頃は栄太郎とそれほど変わらないだろう。

「はい、そうです……」

「初めまして。笹熊福祉事務所の澤井です。先日はお電話で失礼致しました」

澤井が深々と頭を下げた。慇懃なお役人のイメージとは程遠いと思ったが、栄太郎は自分も公務員で生保の地区担当員をしていることを思い出し、思わず苦笑した。

「いえ、こちらこそ。あんな父のために、いろいろとしてくださいありがとうございます」

栄太郎も失礼のないように丁寧に頭を下げた。

「さあ、中でお父様がお待ちですよ」

栄太郎は澤井に促され、火葬場の中へと足を踏み入れた。ここまできて足を留めても仕方あるまいと思った。火葬場の中にカツカツと革靴の音が異様に大きく響いた。

既に棺は釜の前に安置されていた。焼き上げた骨を入れる骨壺も、味気無いシンプルなものだが用意されている。

火葬に立ち会うのは栄太郎と澤井、葬儀屋の本山葬祭ともう一人、若い女性がいた。その女性はハンカチで目頭を押さえている。

(一体、誰だろう?)

そんな栄太郎の疑問に答えるように、澤井が女性を紹介してくれた。

「こちらがお父様を発見してくださいました、ヘルパーの阿部さんです」

阿部がハンカチで顔を押さえながら会釈する。

「どうも、父がお世話になりました」

一体、あんな父を世話する物好きなヘルパーなどいるものだろうか、栄太郎は阿部の顔をまじまじと見つめた。

「さあ、それでは故人との最後のご対面でございます」

葬儀屋が棺の蓋を開ける。一瞬、栄太郎は長太郎の顔を見るのを躊躇った。だが栄太郎に遠慮をしているのだろう。澤井も阿部も歩



み寄ろうとはしない。仕方なく栄太郎は棺の中を覗き込んだ。

長太郎はそこに横たわっていた。生活保護の葬儀では花はつかない。絹に似せた布に包まれて父は眠っていた。

それは穏やかな顔だった。口元に薄っすらと笑みさえ浮かべているではないか。

これがあの、毎日酒を飲んで怒り狂い、母親に暴力を振るっていた父の顔とは思えない栄太郎だった。そう、その顔はまるで悟りを開いた仏のような、別人の顔だったのである。

栄太郎は自然と長太郎に向かって手を合わせた。特に意識したつもりはなかった。何故か長太郎の顔を見ていると、合掌せずにはいられなくなったのだ。

続いて澤井と阿部が覗き込み、合掌をする。

「本当、最後に息子さんに会えてよかったですわね」

阿部さんが涙ながらに呟いた。

「父の死因は何だったんですか？」

栄太郎が澤井に尋ねた。

「死亡診断書には心不全と書かれていました。司法解剖も行政解剖も行われなかったので、事件性はないと警察は判断したのでしょう」  
澤井さんは淡々と答えた。

「でもね、長太郎さんは最後の方はかなり弱っていたのよ。お風呂に入るにも、トイレに入るにもかなり辛そうでした。本当はもっと援助できればよかったですでしょうけど、要支援2では限界があったのよ」

阿部が涙ぐんだ声で言った。

「要支援2……」

「介護保険の基準ですよ。その人の介護度を定めた基準でサービスの量が決まっています。ああ、そういえば北島さんも生保の地区担当員でしたね。このくらいのことにはわかっていますね」

栄太郎が頭を掻いた。どうやら長太郎にはそれほど手厚い介護はなされていなかったようだ。

「それでは、そろそろお別れです」

葬儀屋のその言葉で、長太郎の棺が閉じられた。

重々しい音を立てて釜の蓋が開く。自動扉だが、何せ人を焼く釜だ。その音はたとえ、あんな父を焼く釜とはいえ重いと思った栄太郎だった。

栄太郎は合掌して長太郎を見送った。

長太郎を火葬している間、栄太郎たちは待合室で待つことになった。

阿部が気を利かしてお茶を淹れてくれた。啜ってみると、市役所のお茶と大差のない味だった。いや、この時、栄太郎の味覚は麻痺していたかもしれない。

「これね、長太郎さんが最後に握り締めていた写真よ」

阿部がそう言うて差し出したのは、一枚の写真だった。栄太郎が小学校六年生の時、湯鶴サボテン公園で撮った家族の写真だ。確か通りがかりの人にシャッターを押してもらった記憶が榮太郎にはあった。栄太郎はわざと大きな口を開け、おどけた顔をしている。長太郎は真面目そうな顔でカメラを見つめ、昭子はにっこりと笑いなから栄太郎の肩に手を置いている。それはカラー写真だが、既に色あせてセピア色に近い。

「これを父が握り締めていたんですか？」

「長太郎さんはね、奥様のことは諦めていたみたい。でも、あなたのことだけは諦めきれなかったようで、いつも栄太郎、栄太郎って取り憑かれたように呟いていたわ。よっぽど悔いが残っていたのね」  
「でも、何で笑っていたのかな？」

「最後にその写真を眺めたからじゃないかしら」

写真ひとつで笑って死ねるだろうかと、栄太郎は疑問に思った。

「心不全ってというのは、いわゆる心臓麻痺なんですよ。そいつは相  
当に苦しいらしいんです。それでも安らかな顔で眠りについたとい  
うのは、やはりその写真のお陰なんじゃないですかねえ」

澤井がしみじみと言った。

「お父様の生活態度は真面目でした。お酒はもちろん、タバコも吸わない。いつも謙虚でね。私が訪問すると、お国の世話になって申し訳ないって、いつも泣いていましたよ」

澤井の口から出た言葉は、栄太郎の知る長太郎とはまるで別人であった。しかし、先程見た顔は、穏やかではあったが確かに長太郎の顔だった。

「父は病院には通っていたんですか？」

「脳梗塞を患いましたね。湯鶴病院に入院していたことがあるんです。リハビリで単身生活が営めるくらいまで回復しましたが、左半身に少し麻痺が残りましたね。それでヘルパーさんに入ってもらったんですよ」

「なるほど……」

「じゃあ、父はずっとひとりだったんですか？」

「ええ、もちろん。女の人の影は見えませんでしたね。いつも寡黙に小説を読んだりしていてね。どちらかというと、家に閉じこもりがちでしたかね」

あの長太郎が小説を読むなど信じられないと思う栄太郎であった。記憶にあるのは下劣な雑誌ばかりだ。昭子と栄太郎が逃げ出した後の長太郎は、どうやら栄太郎の知っている父ではなくなったらしい。「父は改心したのかな？」

栄太郎が唸るように呟いた。

「改心というより、もぬけの殻といった印象でした」

阿部がやるせない表情でお茶を啜った。

呼び出しがかかり、釜の蓋が開いた。中から薄茶色の骨が係員により引き出される。

それは頑丈そうな骨だった。かつて土建業で鍛えた体ということもあるだろう。大腿骨の辺りなど、そのままの形で残っている。何度も昭子を蹴りつけた足の残骸がそこにあった。

「これが、親父の骨」

栄太郎は思わず、そう呟いた。

「そう、あなたのお父様の骨ですよ」

澤井が栄太郎に寄り添うようにして言った。後ろでは阿部のすすり泣く声が聞こえる。

(もぬけの殻か。確かに親父の残骸だな)

そんなことを思いながら、栄太郎は澤井と箸で骨を摘まむ。

係員が残りの骨の説明をしながら、手際よく骨壺に収めていった。薄い頭蓋骨が一番上にきている。

「これは埋葬許可書です。これがないとお墓に埋葬できませんから、大切に保管しておいてください」

係員が栄太郎に埋葬許可書を手渡した。栄太郎はその封筒を受け取るのを一瞬、躊躇ったような気もする。しかし気がついた時には、しっかりと受け取っていた。

(この骨をどうしよう……)

栄太郎はこの時、長太郎の遺骨を母の元へ持ち帰ってもよいものかと、まだ迷っていた。おそらく、ようやく落ち着きを取り戻した昭子の心を、激しく揺さぶるに違いなかった。

澤井が埋葬許可書の上に先程の写真を乗せてくれた。どうやら待合室のテーブルに栄太郎が置き忘れていたようだ。

その写真を見て栄太郎の心は決まった。

「明日、お父さんの家の片付けをするんですが、もしよかったら一緒に来てもらえませんか？」

澤井が静かに言った。

帰帆市職員の場合、肉親の死亡では一週間の忌引きが貰える。栄太郎が手伝うことは可能だ。

栄太郎は片付けを笹熊福祉事務所に任せる後ろめたさと、父が人生の終焉を迎えた場所をこの目で確かめたい気持ちが入り混じり、了解しようと決めた。

「わかりました。是非、僕にも手伝わせてください」

「それでは十四時に家の前に来ていただけませんか？ 家の場所、覚えていらつしやいますよね？」

「はい」

栄太郎は力強く頷き返した。

父の家の片付けの約束までし、百日台まで戻ってきた栄太郎だが、いざ自分のアパートの前まで来ると、足取りが重くなった。錆びた階段を一步一步上る。親父の遺骨が異様に重かった。

部屋のドアの前までは来たものの、開けるのをつい躊躇ってしまった栄太郎であった。向こうには昭子がいるのだ。長太郎にさんざん痛め付けられてきた昭子が。

それでも、ここまで来て引き返すわけにはいかない。栄太郎は思い切つてドアを開けた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

落ち着いてはいるが、どこか力の抜けたような昭子の声が返ってきた。

昭子は栄太郎を出迎えてはくれなかった。奥の六畳間にいるのだろう。それでも栄太郎は長太郎の遺骨を昭子に見せようと、足を進めた。

（これは僕の務めだ）

自分にそう言い聞かせるが、心臓の鼓動は鳴り止まない。

襖は閉められていた。

ゆっくりと襖を開けると、昭子は西日のあたる部屋でひとり、正座をしていた。

「それがあの人のお骨かい？」

そう呟いた昭子の顔が随分と老けて見えた。

「ああ、親父の遺骨だよ……」

栄太郎は昭子の前に長太郎の遺骨を置いた。昭子はそれをじっと眺めている。その瞳は潤んでいるようだった。

「それと」

僕はポケットから一枚の写真を取り出した。阿部にもらった湯鶴サボテン公園での写真だ。

「親父は死ぬ時、これを握っていたそうだよ。その死に顔は笑っていた」

栄太郎がそう言うと、昭子は堰を切ったように泣き崩れた。長太郎の遺骨にしがみつき、横隔膜が壊れてしまうのではないかと思うくらいの勢いで泣いた。号泣とは、まさにこのようなことを言うのだらう。

そして昭子は何度も「ごめんね、ごめんね」という言葉を繰り返す。この時、母は心の奥底で、まだ父のことを愛しているのだと栄太郎は思った。でなければ「赤の他人」とまで言った人間に、ここまでの涙を流せるものだらうか。

どうやら自分が両親と過ごした時間と、母が父と過ごした時間は違うらしい。何だか、そんな気が栄太郎にはした。

「このお骨、どうしようか？」

「この人には実家なんてないも同然だからね。今更お墓に入れてもらえるかどうか」

母が力なく呟いた。

「やっぱり、我々の手で供養して、お墓に入れてあげるのがいいのかな？」

「栄ちゃんが許してあげられるんなら、そうしておやり。こんな人でも無縁仏じゃ可哀想だからね」

昭子が涙を拭いながら言った。その目は慈愛に満ちた優しさを湛えている。母の唇が「おかえり」と動いたのを、栄太郎は見逃さなかった。

やはり父の遺骨を持って帰ってきて正解だったと、栄太郎は思ったものだった。

その夜、栄太郎は父の遺骨を枕元に置き、母と一緒に寝た。家族三人で寝たのはいつ以来だらうかと考える栄太郎であった。

昭子の布団からすすり泣く声が聞こえた。

栄太郎は長太郎の火葬で疲れているはずだった。それでも何故か寝付けない。母への心配と父への複雑な思いが入り混ざり、寝苦しい夜だった。

二人とも眠りについていたのは日付が変わってからだだっただろうか。

翌日の電車も混み合っていた。やはり帰帆で窓際の席を取る。今日のシートはしっかりと栄太郎の体重を受け止めてくれた。

帰帆を過ぎて見る海の景色は昨日と変わらない。輝く海も、寄せる白波も見る者が見れば、心打たれる景色だろう。

ただ、今日は栄太郎の胸の中に降り積もる澱はなく、適度な緊張感と期待感が心を支配していた。

そんな気分で眺める海はいいものだ。

湯鶴駅は昔とあまり変わっていないかった。変わったことと言えば、売店が小綺麗になったことと、二力瀬駅と同じようにエスカレーターやエレベーターが設置されたこと、自動改札になったことくらいか。

栄太郎は改札を右に出て、信号の角にある「味の大東」というラーメン屋へ向かった。ここは昔、家族でよく食べにきた店だ。

お店に入ると「いらっしやい」と、若く元気なお兄さんが声を掛けてカウンターへと案内してくれた。

自分では今まで湯鶴町という地は鬼門だと思っていたが、ここだけはホツとすると栄太郎は思う。何故ならば、ここでよく、家族揃って外食をしたからだ。そしてここで父が酒を飲む時はいつも機嫌がよく、笑いが絶えなかった。栄太郎にとって「味の大東」は、湯鶴町で唯一、家族の楽しい思い出が詰まった場所と言っている。

それに店員の愛想のよさも昔と変わらない。栄太郎はこのワンタンメンが好物だ。もっとも子供の頃は量が多すぎて、残りを長太郎が食べていた記憶もある。

程なくして僕の目の前にワンタンメンが運ばれてきた。

ラーメンを啜り、まるでギョーザのようなワンタンを口に入れると、自然に涙が込み上げてくる。長太郎はここで飲む酒のように、何で家でも楽しく飲めなかったのだろうか。そう思うと栄太郎の食べるワンタンメンのスープに涙が垂れた。

「ティッシュ、ありますよ」

お店のお兄さんがティッシュボックスを取ってくれた。ささやかな心遣いが嬉しかった。鬼門と決めつけていた故郷に温かく迎えられた気が栄太郎はした。

腹ごしらえを済ませた栄太郎は海の方へ向かって歩き始めた。長太郎の家、そう、栄太郎の育った家は湯鶴駅から海の方へ向かった土井というところにある。近所は平家の借家が多く、長太郎の家も借家だ。手入れをしていなければ、かなり老朽化していることだろうと栄太郎は思った。

土井は道路が碁盤の目のようになっており、しばらくこの地に足を運んでいなかった栄太郎は、道に迷ってしまった。昔はなかったコンビニエンスストアも建っている。

栄太郎はコンビニエンスストアでペットボトルのお茶とスポーツドリンクを買った。澤井たちへの差し入れだ。きつと力仕事となれば汗も掻くだろう。

しばらく土井の辺りをウロウロしていると湯鶴町役場の文字が書かれたトラックを見つけた。そしてその前にある平家こそが、長太郎の家だった。

澤井が栄太郎を見つけて手を振った。

「こんにちは。ありがとうございます」

上下をジャージに纏った澤井の顔は晴れやかだった。昨日の喪服姿と対照的で、頭に巻いた手拭いがどこことなく可笑しかった。

男の人が二人、もう既に家の中で作業に取り掛かっている。

「息子さん、来ましたよ」

澤井の声で二人が僕の方を向いた。二人とも爽やかな笑顔をして



いる。

「こちらは湯鶴町役場の福祉課の柏木さんと室伏さん」

「どうも、父がお世話になりました」

僕は深々と頭を下げた。

「いえいえ、どういたしまして。この度はご愁傷様です」

二人とも汗をタオルで拭いながら、会釈する。

玄関から覗いただけでも、部屋の中は乱雑なのがわかった。これを片付けるとなると、相当に骨の折れる作業になるだろう。それに何とも言えない異臭が漂っている。それは死臭と腐敗臭か何かの入り混じったものなのだろうか。

似たような臭いを嗅いだことが栄太郎にはあった。独居老人の高山真治が亡くなった時の臭いだ。

それでも栄太郎は気を取り直し、靴を脱いで家の中へ上がろうとした。

「あつ、靴は脱がない方がいいですよ。相当汚れていますから」

柏木が栄太郎に声を掛けた。見ればみんな靴のまま家の中へ上がっている。父の家は自分の家でもあると栄太郎は思っていた。だから、そこを土足で踏み荒らされたような気がして、少し嫌な気分になった。だから栄太郎だけは靴を脱いで上がった。

メリツ……。

足が沈むのがわかった。そして濡れたような感触が靴下を通じて栄太郎の足の裏に伝わる。

「あーあ、だから言ったのに」

既に畳は腐り、何かで濡れている。湿り気の正体が何であるかはわからない。しかし確かに濡れている。

それでも我慢して栄太郎は奥へと進んだ。

部屋の中は一面に下着類や洋服が散乱していた。食べたまま丼ぶりなどもあるようだ。

「単身の割には荷物が多いんだよな」

室伏がぼやくように呟いた。重いタンスを澤井と一緒にトラック

へと運んでいる。以前は昭子の洋服などが入っていたタンスだ。

母は「あの家に置いてきた物に未練はない」といつか言っていたが、果たして本心だろうかと栄太郎は疑問に思っていた。昨日の母の様子を見ると、少し不安になってくる栄太郎であった。

栄太郎は本棚に目をやる。そこには池波正太郎や藤沢周平などの時代小説がぎっしりと詰め込まれていた。週刊誌の類は一切見当たらない。

「こんな物、出てきましたよ」

柏木が差し出したのは、何冊かのアルバムだった。

僕は感慨に耽るようにアルバムを次から次へと捲った。アルバムの中では長太郎は真面目そうな顔を装い、昭子は絶えず笑っている。栄太郎はおどけていることが多い。それはいつも暗くなりがちだった家庭の雰囲気を通してでも明るくしようという、子供心ながらの努力だったのかもしれないと栄太郎は思うのだった。

一段と古ぼけたアルバムがあった。まだ栄太郎が生まれる前の、長太郎と昭子だけが写っているアルバムだ。まだ二人とも若い。そこにいる二人は本当に幸せそうな笑顔を湛えていた。

（これだけは捨てられないな）

栄太郎はアルバムを全部、バッグに仕舞った。少しバッグが膨れ上がり、パンパンになってしまった。それにかなり重い。しかし、帰りには心地よい重みになっているかもしれない。そんな気が栄太郎にはした。

栄太郎も荷物物の搬出を手伝おうと腰を上げた。すると、何か布のようなものに足を取られた。

「うわっ！」

栄太郎は思わず素っ頓狂な声を上げた。よく見ると、栄太郎の足を掬ったのは一枚のブリーフだった。

（これが親父の着ていたパンツ……）

栄太郎の足を掬ったブリーフを掴まみ上げる。するとそれには大便と小便の染みが付着していた。

栄太郎は阿部の「トイレに入るのも辛そうだった」という言葉を思い出した。おそらくトイレにも行けず、漏らしてしまったのだらう。苦しそうにもがきながら、這いずり回る父の姿が瞼の裏に浮かんだ。それでも最後には昭子と栄太郎を見つめ、苦しみを堪え、笑って死んだ長太郎。

「お、お父さん……！」

急に製鉄所の溶鉱炉のように胸の中が熱くなり、一気にドロドロに溶けた鉄が吹き出しそうだった。それは涙腺を緩めて、栄太郎の頬を伝わる。栄太郎はこの時、込み上げる嗚咽を抑えることができなかった。

「うっ、うっ……」

父を棄てた大人が恥も知らず、泣き崩れた。栄太郎の胸の中の溶鉱炉は、灼熱の涙を次から次へと作り続け、流し続けた。それは止まることを知らなかった。

だが、そんな栄太郎を笑う者は誰もいない。

トラックから戻った澤井が、栄太郎の肩にポンと手を添えた。その手の温もりが暖かかった。ほんわかと優しい「気」の流れのようなものが伝わってくる気が栄太郎にはした。

「北島さんは優しい息子さんですよ。ほとんどの場合は拒絶されま  
すからね」

栄太郎はクシャクシャの顔のまま振り返った。澤井は優しくそんな笑顔でそこに立っていた。栄太郎も知っている。澤井と同じ仕事をしているのだ。家族から拒絶されるケースは今まで数多く見ている。

「それにしてもお父さんの場合、発見が早くて良かったですよ」

澤井がしみじみと言った。

「発見が遅れると、大変ですよね」

栄太郎は涙を拭いながら相槌を打った。

「そりゃ、見られたもんじゃありませんよ。ムシに食われたりして  
ね」

「ああ、ありましたよ、そういうの。地区担当員になってすぐだったかなあ……」

「ウジムシは嫌ですね。以前に死後一カ月くらい経った仏さんを発見したことがあるんですけど、ミイラのようにね。布団と密着した部分だけ溶けかかって、ウジムシが溜まっていたんです。あれは強烈だったなあ。目玉なんか食われて無くなっていてね。しばらくの間、食べ物と喉を通りませんでしたよ」

澤井が顔をしかめた。高山真治の死に様が変わった。だが、その話を聞くと、父がそのような状態でなく、あの安らかな笑顔のまま発見されて、まだよかったと思う栄太郎だった。

「残したい物があつたら言ってください。後で取りに来てもいいですから」

澤井がそう言った。栄太郎は大便と小便の付着したブリーフと、汗の染み込んだランニングシャツをビニールに包むとバッグに入れた。そう、高津貴が母親のパンツを仕舞ったように。

不思議とそれが汚らしいとは思わなかった。

「いや、これだけでいいです。今の家は狭いですから」

「じゃあ、あとの物は処分しますよ」

栄太郎は一呼吸置いて頷いた。

栄太郎が幼い頃に沢山シールを貼った机も、室伏とトラックへと積んだ。話によると、二カ瀬町の山の上にあるゴミ処理場に廃棄するのだとか。栄太郎は思い出が軋む音を立てて壊されるような気がしたが、こればかりは仕方がない。

「あー、これ終わったら大東で手羽先とチャーシューをつまみに一杯いくかなあ」

室伏が背伸びをしながら呟いた。

「ああ、あそこのワントンメン、美味しいですよ。でも、あそこで飲んだことはないなあ」

澤井の顔からは汗が滴っている。それは早くビールでも飲みたいと訴えているようだ。

栄太郎は先程食べた「味の大東」のワンタンメンの味を思い出した。そして楽しかった家族の思い出を。

（そうだ。思い出は胸の中にあればそれでいい。それで十分じゃないか）

栄太郎はそう自分に言い聞かせていた。

ふと、がらくたの山の中にフライパンがあるのを見つけた。昭子が昔使っていた鉄製のフライパンだ。僕は何げなくそれを手にした。どうやら長太郎は、昭子と栄太郎が逃げた後も、ずっとこのフライパンを使い続けていたらしい。

生活保護費が少ないことくらいは栄太郎にだって理解できる。おそらく長太郎は自炊していたのである。このフライパンを使って料理をしていたに違いない。鉄に染み込んだ油が独特の光沢を放っている。

一体、父はどんな気持ちで、このフライパンを使っていたのだろうか。と栄太郎は思う。侘しさを噛み締めながらも、去った家族の思い出にしがみつきながら、ひとり台所に立つ父の背中が栄太郎には見えた。

「すみません。このフライパンも持って帰ります」

さすがにフライパンまではバッグに入りきらない。それは手で持っていくしかない。電車の中でフライパンを剥き出しにして帰るのは少々恥ずかしいが、栄太郎はどうしてもこのフライパンを持ち帰りたかった。

家の片付けが終わったのは夕方だった。

みんな最後には汗だくだった。トラックも家とゴミ処理場を何往復しただろう。

栄太郎は長太郎のために沢山の人が関わり、尽くしてくれたことを知り、感謝の気持ちで一杯だった。

きつと父も葛藤があったと思う。そして自分を責め続ける、悔悟の日々を送ったに違いないと栄太郎は思った。そんな哀れな父の姿

を見て、ここまで多く人たちが関わってくれたのだらうと推測する。同時に、澤井と同じ生活保護の仕事をしながら、今まで父に何もしてこなかった自分が急に恥ずかしくなった栄太郎だった。かと言って今更できることは限られている。

「あのー、澤井さん。父の葬儀代や片付けの費用なんですけど、私が出しますよ」

栄太郎は声を忍ばせ、澤井の耳元で囁いた。

「ああ、片付けは費用がかかっていますよ。すべて自前ですからね。葬儀の費用は……、弱ったなあ。本山葬祭さんに福祉でやるって伝えちゃったんですよ」

頭を掻きながらも、澤井の顔は笑っていた。

その後、栄太郎は子供の頃によく遊んだ公園に立ち寄った。公園の隅に大きな、赤いタコや魚の形をした遊具がある公園を、みんなは「海底公園」と呼んでいた。

栄太郎はベンチに腰を下ろし、遊ぶ子供たちに目をやる。無邪気に遊ぶ子供たちに、幼い日の自分が重なった。

タコの近くで男の子が泣いていた。どうやら母親に叱られているようだった。栄太郎はその母親を見た。それは栄太郎にとって忘れることのできない顔だった。

(あれは、昌子じゃないか……)

その母親は小学校三年生の時に、二力瀬小学校から転校してきた青木昌子に間違いなかった。

昌子は転校生ということで、最初はクラスでからかわれたり、仲間はずれにされたりしていた。子供の社会とは、ある一面で大人の社会より残酷なものである。

昌子の家はこのタコ公園のすぐ近くにあった。栄太郎はひとりで彼女が海底公園で遊んでいるのを、よく見かけたものだ。

栄太郎は子供心にも昌子に同情していた。学校で理不尽な仕打ちを受ける彼女の姿に、家で辛い思いをしている自分自身の姿が、ど

ことなく重なつて見えたのだ。

ある日、栄太郎は思い切つて海底公園で遊ぶ昌子に「一緒に遊ぼう」と声を掛けてみた。彼女は少し強張つた顔をしたものの、すぐにニコツと笑い、「うん」と頷き返してくれた。あの時の嬉しそうな彼女の笑顔は今でも忘れない栄太郎である。

それからというものの、海底公園が昌子と栄太郎の遊び場になった。どこかお互いに惹き合うものがあつたのだろう。ここでは嫌なことを忘れ、まるで傷を舐め合うように、暗くなるまで遊んだのだ。

昌子とは小学校から高校まで一緒だつた。別に正式に交際をしていたというわけではないが、相変わらず仲は良かった。昌子と一緒にいると、家庭での嫌なことを忘れられ、ホツとできたのだ。栄太郎が自然に振る舞える居心地のよい場所。それが昌子との時間と空間だつた。

だから帰帆市へ引つ越した時、父から逃げられた解放感と同時に、栄太郎は心の寄り処を失つたような気がした。それは何も告げずに去つた、昌子への罪悪感を伴つて……。

昌子はヒステリックな金切り声で子供を叱り付けている。男の子はベソをかきながら泣いていた。

「ママー、ごめんなさいー！」

だが昌子は膨れつ面を崩さない。

栄太郎はベンチから腰を上げると、男の子の前にしゃがんだ。そして頭を撫でてやる。

「大丈夫だよ。ママだつて許してくれるよ。ママにとって君は宝物なんだ。君にとつてもママは宝物だよね？」

「うわーん！」

男の子は大泣きをしながら、昌子の腰に抱き着いた。昌子は困つたような顔をしながらも、そつと男の子の肩を抱いた。

栄太郎は顔を上げ、昌子の方を見る。昌子は目の前にいる男性が誰だかすぐに気付いたのだろう。口に手を当て、目を丸くしながら「あっ！」と叫んだ。

「栄ちゃん……？」

「そうだよ」

栄太郎は笑顔を返した。昌子はまだ信じられないといった表情をしている。

「久しぶりだね」

しかし昌子は答えることなく、そのまま固まってしまった。

夕暮れの公園にやるせない空気が流れた。

どれ程の沈黙が続いただろう。突然、昌子の頬から一筋の涙がこぼれた。

「どうしたの？ ママー」

昌子は子供の肩に手を置きながらも、ボロボロと涙を流し続けている。

「栄ちゃん、やっと帰ってきたてくれたんだね」

そう言った時には、昌子の顔はクシャクシャに近かった。

昌子と栄太郎は公園のベンチに座った。男の子はまた無邪気に夕日の遊具で遊びだしている。

「実は親父が死んでね」

栄太郎から話を切り出した。

「そうなの。お父さんから逃げたっていう噂を聞いていたけど、本当だったの？」

「ああ、お袋がいつも親父に殴られていてね。それで逃げたんだ。

俺は今、川崎の製鉄所で働いているんだ。お袋と二人暮らしさ。親父はこの湯鶴町で生活保護を受けていたんだ。福祉事務所から連絡があつてね」

「そんなお父さんでも、最後を看取ったの？」

「まさか。孤独死つてやつさ。今日は家の片付けに来たんだ。でも不思議なものでなあ、親父の死に顔を見たり、家を片付けたりしているうちに何だか親父が哀れに思えてさ」

「そう……」

昌子が寂しそうに呟いた。栄太郎はその声に、思わず昌子の横顔



を見た。夕陽に照らされたその横顔は、ひとりで寂しそうに遊んでいた、あの時の昌子の横顔にそっくりだった。

「ところでマーちゃん、旦那さんって、どんな人？」

栄太郎がそう尋ねると、昌子は一呼吸置いてから口を開いた。

「別れたわ」

「えっ？」

「もともとチャランポランな人だったの。まあ、子供ができちゃったから、何となく一緒になっただけで感じかな。でも、あいつは変わらなかった。結局、あいつ、覚醒剤に手を出して逮捕されてね。それで離婚を決意したのよ」

昌子は無表情に語った。

「じゃあ、今は母子家庭なのかい？」

僕は昌子の顔を覗き込むようにして尋ねた。

「うん。実家に身を寄せているの。私もクッキー屋で働いているけど、それだけでは食べていけないから、結局、今でも親のスネを齧ってる」

そう言う昌子の視線は宙を泳いでいた。おそらく自分でも、この先どうしたらよいかわからないのだろう。

「はあーっ、私たち、これからどうしたらいいんだろう？ 最近、ちよつとしたことでイライラして、ついあの子に八つ当たりしちゃうのよ。栄ちゃんの言う通り、あの子は宝物なだけだね」

昌子が頭を抱え、掻き毟った。昔から自慢の長く、ストレートの髪が乱されていく。それはまるで己自身を傷つけているかのようだ。昌子を良く知る栄太郎としては、見るに忍びない光景であった。

「はあー、何で栄ちゃん、私の前から突然、消えちゃったのよ？」

「えっ？」

唐突な昌子の問いかけに、僕は一瞬、言葉を失った。

「あれからというものの、私の人生、狂いっぱなしよ」

「マーちゃん、もしかして僕のこと……」

「当たり前じゃない。男って本当に鈍いんだから」

昌子の瞳がまた潤みだした。

「じゅめんよ」

ジーンズの上で硬く拳を握る昌子の手の上に、栄太郎はそっと掌を置いた。拳がプルプルと震えるのがわかった。

「うわああーん！」

突然、昌子が大声を上げて泣き出した。男の子は母親の異変を逸速く察知し、タコの遊具から駆け寄ってきた。

「ママァッ、どうしたの？」

子供の不安げな表情が切ない。

「何でもない、何でもないのよ……」

昌子は子供にそう言うが、時折、ヒックヒックと肩が痙攣している。

「大丈夫だよ……」

僕が男の子の頭を撫でてやった。

「この子の父親が栄ちゃんだったらよかったのに……」

栄太郎はその言葉に心臓がドキッとした後、ギューッと締め付けられた。

夕日に照らされた昌子の涙は悲しくも、どこか美しい。

僕は男の子の顔をまじまじと見た。あどけなく、可愛い顔をしているではないか。

「君、名前は？」

「光」

「いくつ？」

「みっつ」

男の子は栄太郎の質問に素直に答えてくれた。その瞳はまだ穢れを知らない、無垢の瞳だ。

「ねえ、携帯電話、持ってる？」

栄太郎が昌子に尋ねると、彼女はジーンズのポケットから、デコレーションされたいかにも女の子らしい携帯電話を取り出した。

「よかったら、番号とアドレスの交換をしようよ」

昌子は「への字」になった口元を緩め、少しはにかむように笑うと、「うん」と小さく頷いた。だが頬は化粧が落ち、グシヨグシヨだった。

お互いに携帯電話を弄くる。その間、僕は子供の頃、昌子がよくうちに電話を掛けてきたことを栄太郎は思い出していた。

(そう言えば、あの時も昌子から電話が掛かってくるのを、ウキウキしながら待っていたっけ)

栄太郎はあの頃から昌子のことが好きだったのかもしれない。単に幼なじみという言葉では片付けられない、思慕のような感情を抱いていたのだ。黒電話の前で齧り付くようにして、昌子からの電話を待っていたあの頃の感情が沸々と甦る。

「今日は会えてよかったわ。よかったら電話して」

そう言う昌子の顔は晴れやかだった。栄太郎は初めて声を掛けた時の、あの笑顔に似ていると思った。

「必ずするよ。でも僕たちには黒電話の方がお似合いかもな」

「着信音だけでも黒電話にしておこうか？」

「あっ、それいいかも」

二人で和やかに笑った。

「ところで、どうしたの？ そのフライパン」

やはりフライパンは昌子の目にも異様に映るらしい。

「片付けた荷物の中にあつたのさ。お袋が使っていたやつだね。僕たちが引越した後も、親父が使っていたんだ」

「それをお母さんに？」

「うん。お袋の想いと、親父の想いが詰まった、この鉄のフライパンがそのまま捨てられるのが、何となく忍びなくなってきた。それにこれを作った人も悲しむだろうなって。僕、今は帰帆市で生活保護の仕事をしているんだけど、親父の死に直面して、すごい仕事をしているんだなと思ったよ」

「そっか。栄ちゃんは相変わらず優しいね。それに、自分の仕事に誇りを持っているなんて立派だな」

「そんな立派なもんじゃないよ」

栄太郎は照れながら微笑み返した。

だが、この忌引きが明けてデスクに向かい、家庭訪問する自分は、昨日までの自分とは違つたと栄太郎は思つた。

それから昌子親子を家まで送つた。光一を挟み、三人で手をつなぐ姿は、知らぬ人が見れば、仲の良い親子に見えても不思議はないだろう。

父の死後で不謹慎かもしれないが、こんな幸せがあつてもいいと栄太郎は思つた。父には果たせなかつた、幸せな家庭を築きたいと思つた。

(この子なら、自分の子として愛せるかもしれないな)

光一のあどけない笑顔を見て、ふと、そんなことを思つた。光一も僕に屈託のない笑顔を向けてくれる。

光一が誰の子でも、この際、関係はない。昌子とならば、幸せを掴めそうな気がした。それはまるで、磁石のS極とN極が引き合うように、自然と惹かれ合うものかもしれない。

昌子の家の前で僕は二人に手を振つた。

「お兄ちゃん、また会おうね」

光一がにつこりと笑い、大きく手を振る。

「夕方だったら、だいたい空いているから、電話ちょうだいね。メールはいつでもOKよ」

昌子のはにかみながら、小さく手を振る。

「ああ、必ず黒電話を鳴らすよ。それから、もしよかつたら、このフライパンを使つてくれないか？」

「えっ、でも大切なフライパンなんでしょう？」

「マーちゃんに使つてほしいんだ……」

昌子はしばらく僕の目を見つめた後、コクリと頷いた。そして微笑む。

「私でよかつたら、使わせてもらつわ」

「ありがとう」

栄太郎は夕陽に照らされて、プリズムのような光沢を放つフライパンを、昌子に手渡した。鉄は熱を伝え易い物質である。その鉄を通じてお互いの体温はおるか、気持ちまでが伝わるようだった。

「じゃあね」

栄太郎はメトロノームのように手を振って歩きだした。

角を曲がるまで、何度も昌子の家を振り返る。昌子も貴もずっと僕を見送り、手を振っていた。栄太郎も振り返る度に手を振る。

角を曲がるのを躊躇った。しかし今はここで足踏みをしているわけにはいかなかった。栄太郎は断腸の思いで、曲がり角の一步を踏み出した。

栄太郎は茜色に染まった湯鶴の町を駅の方へ向かって歩き出した。すると海底公園の前をもう一度通ることになる。再び公園内に足を踏み入れると、栄太郎はタコの遊具に歩み寄った。そして思い出の染み込んだ、コンクリートの赤いタコをそつと撫でる。

過去の思い出だけではない。これからも思い出を重ねていくタコかもしれない。そんな思いでタコを撫でた。

そしておもむろに携帯電話を取り出すと、着信音を黒電話に変更した。そして黒電話が何回か鳴った後に、あのフライパンが栄太郎のところに戻ってくるような気がした。女の予感はあるというが、時には男の予感だって当たる時があると栄太郎は自負していた。

公園を後にし、再び歩きだした栄太郎は喉が乾いていることに気が付いた。

（そうだ。もう一度、大東に寄ってみよう）

ふと、栄太郎は思いついた。室伏も「味の大東」に行くと言っていた。もしかしたらまた会えるかもしれない。

いつの間にか、速足になっていた。

信号の角にある「味の大東」の自動ドアをくぐると、お店のお兄さんが「いらっしやい」と元気な声を掛けてくれた。昼間と違い、客はまばらだ。

「あれ、お兄ちゃん、昼間も来なかった？」

お店のお兄さんは客の顔をよく覚えていらっしゃるらしい。

「今は空いているから、テーブルでもカウンターでもいいよ」

栄太郎は奥の座敷を覗き込んだ。思った通り、そこには澤井と柏木、それに室伏がいた。みんなチャイシューや手羽先をつまみにビールを煽っている。

「先程はどうも」

栄太郎が声を掛けると、真っ赤な顔をした室伏さんが、人懐っこい顔で手招きをする。

「こつち、こつち」

「混ぜてもらってもいいですか？」

「もちろんですとも」

澤井が爽やかに笑った。

「お兄ちゃん、何にする？」

お店のお兄さんが注文を聞いてきた。

「焼酎をもらおうかな」

「割るものは？」

「いらない」

「じゃあ、氷と水でいい？」

ここの焼酎は酒屋で売っているようなカップの焼酎をそのまま出す。それを自分の好みのもので割って飲むのだ。

長太郎はいつもカップのまま、一杯目はグーッと飲み、二杯目からはチビチビと飲んでいった。

「今日はどうもありがとうございました」

栄太郎は正座をし、改めて澤井たちに頭を下げた。彼らにはいくらか感謝の意を表しても限りがないと思う栄太郎だった。それは同じ仕事をしているからこそ、より一層強く思えるのだ。

「いいんですよ。これが私たちの仕事ですから」

澤井がにっこり笑って言った。最初に彼から電話が掛かってきた時との距離は確実に縮まり、旧知の仲のように思える栄太郎であっ

た。柏木も室伏もそうだ。

「いやー、今日の片付けはしんどかったけど、良かったなあ。こつやつて息子さんも来てくれたし」

柏木が真つ赤な顔をして笑った。彼の顔も爽やかだ。

「終わり良ければすべて良し、ですな」

室伏が振り向き様にビールのおかわりを注文する。

程なくしてビールと焼酎が運ばれてきた。

「じゃあ、改めて献杯」

栄太郎は焼酎のカップを、三人はビールのグラスを掲げた。

栄太郎は焼酎に映る自分の顔を眺めた。栄太郎は自分の顔を見て、憑き物が取れたような、晴れやかな顔をしていると思ったものだった。

(お父さん、もう許してやるよ)

心の中でそう呟くと、僕は焼酎をグラスに空けることなく、カップのままグーツと飲み干した。

「おお、やるねえ」

栄太郎が焼酎を飲む様を見て、柏木が驚いたように言った。

「親父がよく、この店でこつやつて飲んでいたんですよ」

「なるほど、お父さんに捧げる一杯ってわけですか」

柏木が微笑んだ。

「すみません。焼酎のおかわりと、おしんこ、チャーシュー盛り合わせに手羽先八本！」

栄太郎はお店のお兄さんに大声で注文した。

すると、焼酎とつまみが運ばれてきた。僕は焼酎をチビチビと啜り始めた。

「さっきの勢いはどうしたんですか？」

室伏さんが冷やかすように笑った。特に悪気があったわけではないことはわかっている。

「親父はね、二杯目からはチビチビやっていたんですよ」

「そうでしたか」

僕は先程からあまり喋らない澤井さんの顔を見た。彼は冗談話を交えて、笑う柏木さんと室伏さんを見てニコニコしながらビールをチビチビと飲んでいる。

「澤井さん、この仕事って辛くありませんか？」

「そりゃあ、辛いことの方が多いですね。よく苦情も言われるし、時には体を張ることだってあります。仕事の九割は苦しいかな」

それでも澤井は笑顔を絶やさない。

「よく続けられますね」

栄太郎は真剣な顔をして澤井の目を覗き込んだ。だが彼の目は優しそうに笑っている。

「ふふふ、今回みたいなことがありますからね。だから続けたくなくなるんですよ」

澤井の目はまるで栄太郎に感謝をしているようだ。感謝をしなればならないのは自分の方なのにと栄太郎は思う。

「どんな仕事でも、真剣に打ち込めば辛く、苦しいものですよ。家族や守らなければならぬものが増えれば肩にその分、余計な重みも加わるし」

澤井の口調は爽やかだった。

「人だつて、この混沌とした現代で生きていくのは大変な状況ですよ。バブルが崩壊してから保護率も上がりましてね。今も長引く不況で右肩上がりでしょう。全国平均でも百人に一人くらいは生活保護を受けている計算になりますからね」

「確かに統計月報を見ると凄まじい勢いですものね。で、湯鶴町はどうなんですか？」

「まあ、グツチャグツチャですよ。保護率で言えば十六パーミリの手が届くんじやないかな。それだけ貧富の格差が拡大し、低所得層が多いってことですよ」

栄太郎は摘まみかけたチャーシューを口に運ぶのも忘れ、澤井の話に聞き入った。

ただ、今の栄太郎には保護率など問題ではなかった。長太郎の死



を受け止め、未来へ向かって誠実に、そして確実に歩いていくことが大事なのだ。

昌子もクッキー工場の収入だけでは食べていけないと言っていた。もし頼れる実家がなければ、彼女も生活保護を受けていたのだろうか。と栄太郎は思う。脳裏に何人かの母子家庭のケースが浮んだ。

「何か、人の温もりとか、絆とかそういうものが希薄になっているような気がするんですね。だから、昨日と今日、北島さんが来てくれてホッとしているんです」

「私もようやく父を許す気になりましたよ」

栄太郎はチャーシューを口へ運び、半分位に減った焼酎を眺める。そこにあの日の父が浮かぶ。

「湯鶴町はどうですか、湯鶴町は？」

酔いの回った柏木が、身を乗り出して尋ねてきた。

「正直言つて、昨日までは鬼門だったんですけどね。今日は改めてすばらしい故郷であることを実感しましたよ」

「よっしゃあ！」

柏木と室伏が腕を組んだ。

栄太郎の心の中は、喉に刺さった魚の骨のようだった父の存在に一区切りをつけられたことと、昌子との再会の喜びで満たされていた。

昌子と再会できたのも、もしかしたら父が編んでくれた運命の糸なのかもしれないと思う栄太郎であった。思わずポケットの携帯電話を確認してしまう。昌子親子が側にいてくれたら、おそらく仕事への意欲も更に上がるに違いない。

何かの歯車が動き出していることは確かだった。

気が付いたら、栄太郎の焼酎は空になっていた。三人のビールも残り少ない。

「俺たちも焼酎にするか」

柏木が焼酎を注文する。さすがにストレートとはいかず、烏龍茶で割るようだ。栄太郎も焼酎の追加を注文する。

「強いですねえ」

澤井が呆れたように言った。

「さあ、さつきは北島さんのお父さんに献杯をしたから、今度は北島さんの今後と、我々の今後の発展を祝して乾杯をしようじゃないか」

柏木が明るい声で言った。

程なくして運ばれてきた焼酎。三人はそれぞれ自分で烏龍茶割りを作る。普通、町の職員が県の職員のグラスに注いだりするものだと思っていたが、そんなことは一切しない。それぞれ思い思いにグラスに注ぐ仕草が自然で、少しもいやらしくなかった。

「それじゃあ、今度は乾杯！」

三つのグラスとひとつのカップがまたぶつかり合う。

言葉を超える、打ち解け合った空気がそこにあつた。父との関係もただ和解という言葉で片付けられるものではないと栄太郎は考えていた。

そして今日から故郷として復活した湯鶴町。また、これからも昌子を通じて関わっていくであろう湯鶴町に思いを込めて、ストレートの焼酎を啜った。

忌引きが開け、栄太郎が出勤すると、高橋係長が手招きをした。

「今回は大変だったな。ご愁傷様」

「いえ、取り敢えずは父の墓を作らないと……」

「そうか……。ちゃんと遺骨は引き取ってきたんだな」

「はい。家の片付けも済ませました」

栄太郎がそう言うと、高橋係長は満足そうに微笑んだ。だが、すぐに真剣な顔に戻る。

「忌引き明けて申し訳ないんだが、実は小山藤吉が危篤らしいんだ。愛向会病院ではまた新生会病院に移すことも考えているらしい。溜まった仕事を処理する前に一丁、様子を見てきてくれないか？」

「わかりました」

栄太郎は上着を羽織ると、公用車のキーが仕舞ってあるボックスへ向かった。そして、無造作にキーをひったくると、階段を下りた。駐車場で公用車に潜り込み、エンジンをかける。少し整備の悪い公用車はガタピシ言いながら、ブォーンという爆音を上げた。

栄太郎は公用車を運転しながら、人の死について考えていた。栄太郎は思う。そこには人それぞれの想いが介在すると。父、長太郎の死についても母の存在がなかったら、それこそ無縁仏に葬られていたかもしれない。今まで何人か無縁仏にケースを入れてきた栄太郎ではあったが、それは人の尊厳からかけ離れているような気がしてならなかった。だったら、自分にできることは何だろうとも考える栄太郎であった。

物思いに耽っていると栄太郎の運転する公用車は愛向会病院に着いた。

受付へ急ぐと、ケースワーカーの野地が栄太郎を待ち構えていた。

「北島さん、遅かったよ」

「え？」

「今しがた、小山藤吉が息を引き取ったんです」

「そうなんですか？」

「他の患者との関係もあるんで保護室で様子を見ていたんだけど、巡回したら死んでいてね。まあ、死亡診断書には発見した時刻を記載しておくから。しかし、参ったよなあ。うちは精神病院だろう。ああいう死に方はちよつとねえ……」

「ご迷惑をお掛けしました」

野地は栄太郎を霊安室に案内した。それほどこの病院で死ぬ人間は多くはないのだろう。霊安室は狭かった。

「葬儀屋はどうします？」

「辰巳屋さんをお願いしたいと思います。わけありのご遺体をよく引き取ってくれるので」

「こつちも巡回してみたら死んでいたなんていうのは不名誉なことなんでね。ひとつよろしくお願いしますよ」

栄太郎は小山藤吉の顔にかけられている布を取った。だらしなく開いた目と口が、彼の末路を象徴していた。

「親族つていましたっけ？」

野地が遺体を見ながら、栄太郎に尋ねた。

「妹が隣の持立市にいますよ。何とか話をつけてみます」

「引き取ってくれるかね？」

「やってみますよ。それが僕の仕事ですから」

栄太郎には先日の笹熊福祉事務所の澤井とのやり取りが記憶の中で膨れ上がっていた。

（人の死にはそこに想いが介在する）

そんな思いで、栄太郎は小山藤吉の遺体を見つめた。

市役所に戻った栄太郎は辰巳屋に連絡を入れた後、すぐに持立市に住む小山藤吉の妹、古谷啓子に連絡を入れた。

「あんな兄でも私にだけは優しくかったです」

古谷啓子はそう言って、葬儀を引き受けてくれた。栄太郎は内心、ホツとしていた。

だがその一時間後、古谷啓子からまた電話が掛かってきた。

「あのー、申し上げにくいのですが、兄の葬儀はやっぱり出来かねます」

「えっ、どうしてですか？」

「両親が猛烈に反対しております……。暴力団員は親族の墓には入れられないと……」

「確かに小山さんは暴力団に所属していたかもしれませんが、でも、死んだ人間ですよ。その罪ももうこの世にはないんですよ」

「でも、親族に猛反対されていて、私、どうしたらいいかわからなくって……」

電話口の向こうで古谷啓子は泣いていた。栄太郎は必死の説得を続ける。父の死を乗り越えたからこそ、説得しなければと思った。

「古谷さん、無縁仏がどんなものかご存知ですか？ あそこに入っ

てしまうと、生きていた証さえも末梢されるようなものですよ」

「うつつ……」

古谷啓子は電話口で泣き続けていた。

「実は僕の父も死にましてね。もう少して無縁仏に入れられるところでした。古谷さんに後悔だけはしてほしくないんです」

「わかりました。両親は呼ばずに、私だけで何とかします」

その言葉を聞いて、栄太郎は高橋係長に向かい親指を立てた。栄太郎の心の中で少しはすっきりとした感じだった。

栄太郎は人の死に対するイメージが確立されつつあった。確かに尊厳のない死も存在する。高山真治や横井啓太のように人から忘れ去られるような死もあった。しかも人の死に様も決して綺麗なものばかりではない。だが、関わる者としての想いが、今の栄太郎にはある。確かに葬儀とは崇高な儀式ではあるが、そこに関わるにはドロドロとした情念が渦巻いているのである。そこを浄化させるのも自分の役割だと栄太郎は認識していた。

「話もまとまったようだし、今夜あたりホッピーが飲みたいな」

高橋係長が栄太郎の方をチラッと見て言った。

「飲みたいですね。今夜は僕もホッピーで付き合いますよ」

栄太郎は爽やかな笑顔を、高橋係長に向けた。

(了)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7268k/>

---

それぞれの死

2010年10月8日15時22分発行